

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.227

2012年4月

平成23年度卒業式を挙げる



目次

●ニュース	
平成23年度卒業式を挙	3
平成23年度「赤崎賞」授賞式を挙	12
濱口総長が第2回日越学長会議に出	13
佐分理事がウズベキスタンを訪問し人材育成に関する国際会議に出	13
第1回G30国際プログラム紹介のための交流イベントを開	14
「知財ポートフォリオ形成モデルの構築事業」の成果報告会を実施	14
産業技術総合研究所との連携・協力協定記念講演会を開	15
留学シンポジウムを開	15
平成23年度卒業・修了留学生を送る夕べを開	16
理学研究科博士課程後期課程3年の小山さんが日本学術振興会育志賞を受	16
2011年度学生論文コンテストの表彰式を挙	17
●知の先端	
光速度不変の原理への挑戦	18
田島 宏康 (太陽地球環境研究所教授)	
●知の未来へ	
「来たよ」「見たね」「勝ったぞ」一言語コミュニケーションにおける	20
談話管理標識の働き	
大島義和 (大学院国際開発研究科准教授)	
●地域にひらく	
東山動植物園との連携協力について	21
●学生の元気	
平成23年度名古屋大学総長顕彰 8名1団体表彰	22
平成23年度名古屋大学総長顕彰 受賞者及び受賞団体のことば	24
●部局ニュース	
文学研究科公開シンポジウム「ことばの形と意味」を開	27
西洋中世・近世フランス古文書学ワークショップを開	27
2011年度がんを生き抜くライフピアスクール修了式を挙	28
第4回若手シンポジウムを開	28
国際シンポジウム「アジアにおける臨床環境学研究的展開」を開	29
大学教育改革フォーラム in 東海2012を開	29
ICCAE 2011年度第10回オープンセミナーを開	30
合同セミナー・シンポジウム&ラボツアーを開	30
2008ノーベル賞展示室来場者1万人突破の記念式典を挙	31
外部評価委員会を開	31
外部評価委員会を開	31
第22回博物館企画展「奈良坂源一郎『蟲魚圖譜』—解剖学創始者の	32
ミュージアム」を開	
ポタニカルアート作品展を開	33
第44回博物館コンサート「早春の音楽会」を開	33
第4回地球教室「鉱物をさがそう！」を開	33
●資 料	
平成24年度名古屋大学組織図	34
●受賞者一覧	35
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成24年2月16日～3月15日	39
●イベントカレンダー	42
●ちょっと名大史	
創薬科学研究科の原点—半世紀前の薬学部設置計画—	44

平成23年度卒業式を挙





平成23年度名古屋大学卒業式が、3月26日(月)、豊田講堂において挙行されました。

午前9時30分から修士・専門職・博士学位記授与式が、続いて午後11時40分から学士学位記授与式が行われ、会場の豊田講堂は卒業生で満員となりました。

名古屋大学交響楽団が演奏する「ニュルンベルクのマイスタージンガー」前奏曲(ワグナー作曲)で始まった式典では、来賓の方々が見守る中、濱口総長から修士課程及び博士課程前期課程修了生1,627名に修士学位記が、大学院法学研究科専門職学位課程(法科大学院)修了生84名に専門職学位記が、医学博士課程及び博士課程後期課程修了生252名に博士学位記が、また、学部卒業生2,211名に学士学位記が、それぞれ授与されました。

総長は、修了生及び卒業生に対し、それぞれ送別のことを贈り、激励しました(詳しくは、総長の辞をご覧ください)。

次に、大学院情報科学研究科博士課程後期課程修了生の柴田誠也さんが修



了生総代として、また、法学部卒業生の加藤大輝さんが卒業生総代として、本学への感謝の気持ちと今後の抱負等を述べました。

続いて、来賓として、名古屋大学全学同窓会副会長の柴田昌治日本ガイシ株式会社相談役より心のこもった祝辞をいただき、(詳しくは、来賓祝辞をご覧ください)式典は終了しました。

その後、名古屋大学混声合唱団が、送別の歌として学生歌「若き我等」、「青空が青かった」を合唱、続いて「蛍の光」を全員で合唱し、名古屋大学交響楽団による「威風堂々」(エルガー作曲)の演奏とともに、式典は幕を閉じました。

卒業式終了後には、豊田講堂前に詰めかけた後輩たちから花束を贈られたり、胴上げをされたり、友人や後輩、保護者などと記念撮影をする卒業生の姿があちこちで見られました。

卒業式の様子は、豊田講堂ホワイエ及び中2階、シンポジオンホール、経済学部カンファレンスホール、また、本学ホームページ上においてライブ中継され、多くの方々がこの晴れがましい式典に臨みました。

なお、卒業式の模様は、現在、本学のホームページ(<http://www.nagoya-u.ac.jp/about-nu/publication/movie/>)で視聴することができます。

平成23年度大学院修了式祝辞

名古屋大学総長 濱口 道成

名古屋大学は、本日ここに、平成23年度大学院修士課程及び博士課程前期課程修了者1,627名に修士学位記を、大学院専門職学位課程修了者84名に専門職学位記を、医学博士課程及び博士課程後期課程修了者252名に博士学位記を授与いたしました。学位記を授与された皆さんに教職員を代表して心からお祝いを申し上げます。

さて、今日皆さんは、改めて、大学での生活を思い起こし、様々な出来事を振り返られている事と思います。皆さんの名大での学生生活は、どのようなものだったでしょうか。入学した時の期待通りの成果は得られたでしょうか。どんなことが、心に残っていますでしょうか。振り返れば、皆さんが学生生活を過ごした時期は、日本にとって、大きく価値観が変換する時代でした。私たちは今、明治・終戦後に続く第3の時代の転換点に生きていると思っています。この間、様々な出来事がありました。とりわけ我々に衝撃を与えたのは、昨年の中日本大震災でした。お祝いの式典ではありますが、この大震災を振り返り、この震災のもたらした意味について、改めて考えてみたいと思います。

今回の災害発生にあたり、名古屋大学は東日本大震災対策本部を立ち上げ、医師の派遣、支援物資の発送、そして義援金を集める活動を行ってきました。また、震災に関するシンポジウムはこの1年間で9回開催し、市民とともに震災について議論を深めてきました。医療団の派遣は、150人を超え、先日33番目のグループが名古屋に戻ってきたばかりです。現地では、まだ様々な困難を抱え、厳しい生活を送っておられる方が多数いらっしゃいます。また、皆さんの中にもボランティアで現地へ出かけられた方が多数いらっしゃいます。

この東日本大震災の発生以来、私は折に触れて、アンドレ・ジイドの言葉を思い起こします。それは、「毎日平凡な事を、平凡に行うことは、非凡である」という言葉です。40年以上前の事です。この言葉を読んだ時は、詭弁的な表現に思え、心理的に抵抗を感じました。しかし、大震災の後、この言葉が繰り返し心に浮かびます。「毎日平凡な事を、平凡に行うことは、非凡である」この言葉は、誠実な毎日を送ることのむずかしさを意味していると思いますが、一方で一見平凡に見える毎日が、実はかけがえのない時間である事も示しているように思います。



皆さんが、今日の卒業式を迎えるまでの20数年間の生活は、一見平凡なものに見えていても、実はかけがえのない生活であったと言えます。そして、この幸福な生活は、君たちのご両親はもちろん、多くの人々の支えによって実現したものであると言えます。だから、私たちは、幸福であることへの責任があると言えます。大震災を振り返り、改めてかけがえのない存在として、家族、友人を大切にすること。そして、毎日毎日を真剣に、誠実に生きる事が今改めて私たちに求められていると思います。そして、平凡に思える毎日が、実はかけがえのない幸福である事を改めて実感していただくとともに、自分の幸福を自分だけのものにしてしまうことのないようお願いします。自分がどうしたら社会の役に立てるか、自分の仕事に専念する中で、人々の幸福を支えることができるか。これから就職する方々は、現場に出てみると、毎日の仕事がつまらない、飽き足らないものに見える事が多々あるかもしれません。しかし、すぐに諦めることなく、平凡に思える仕事の連続の先にある非凡を冷静に描き、誠実に自分なりの人生を送っていただきたいと願います。

震災に関して、もう少しお話したい事があります。1つは、日本の文化の力についてです。今回の東日本大震災にあたり、私は海外の友人から多数のメールを受け取りました。メールの中で、彼らが異口同音に述べている事は、被災された日本人の静かな強さ、お互いを思いやる心、です。そして、彼らは言います。きっと日本は復興できるだろう、と。皆さんも実感されていると思いますが、私は小さな子どもの中にもその姿を見るように思います。私は、悲劇の中で、改めて日本の持つ文化の粘り強さを海外の友人から教えられた思いがします。

2つ目は、海外からの支援についてであります。震災後、名大の連携している海外の大学を訪れる機会が何度かありましたが、多くの国々が、日本に様々な支援をされている

事に、驚きました。例えば、モンゴルでは公務員の方々が、自分の給料の1日分を寄付されました。私たち日本人は、これほどまでに海外の友好国から熱い支援を頂いた事を、忘れてはいけないと思います。またこの支援は、日本が長年にわたり友好国と連携し、幅広い活動を行ってきたことへの、感謝であるとも言えます。日本は決して孤立していません。また、この体験から、グローバル化の時代を迎え、海外での日本の活動が益々重要になっていることを理解していただきたいと思います。

3つ目は、今日本は少子高齢化時代を迎え、また長期にわたる不況の中、大震災を体験し、厳しい時代を迎えています。この急速に進展する少子高齢化は、人類社会の中で、日本が初めて体験する強烈な困難です。また、東日本大震災と比較される災害に1755年におきたリスボン地震があります。この地震とそれに続く津波によって、ポルトガルの経済は壊滅的な打撃を受けたと歴史に記されています。日本は今直面する困難を超えて、発展できるでしょうか。もちろんリスボン地震の時代と、社会経済の仕組みは大きく違ってきます。しかし、世界は、日本の活動を見ています。日本は、この困難を超える事が出来るのかと。振り返れば、20世紀の科学は多くの利便性と快適性、長寿と物質的幸福を人類社会にもたらしました。しかし一方で、科学の進展は、人口爆発や資源枯渇、食糧危機、環境破壊等の深刻な危機を生み出し、我々は、従来の科学では解決困難な、そして多様な課題に直面しています。更に、今回の大震災を私たちは体験しました。

私たちは、私たちの社会が持続可能となる解決策を見いだせるのでしょうか。私は、大丈夫だと思います。なぜなら、日本は、戦後の荒廃も含め、今まで多くの困難を体験してきました。その中で、日本人は学習し、対策を深め、科学技術を磨くことで、日本は立ち直ってきました。震災後、確かに復興はゆっくりとしていますが、日本経済は決して壊滅的な打撃を受けてはおりません。確かに少しずつではありますが、回復しつつあることが実感できると思います。今私たちは、劇的な体験のできる時代を生きているのかもしれませんが、それは、日本の文化の持つ力強さを示す時代、言い換えれば様々なやりがいと可能性に満ちた時代を生きているのかもしれませんが、そして、その可能性を実現にする力は、君たちの心の中にあると思います。更に、君たちの力を生かす解決法は、科学技術の発展の中にあると私は思います。今我々は、新しい発想と価値観を持った、困難を解決できる科学技術が必要なのです。これから皆さんはいろんな現場で働くと思います。どのような現場で働くとも、どのような立場になろうとも、我々の抱えている困難をまっすぐに見据え、困難に挑戦し続ける人材となっていきたい、これが皆さんの卒業にあたり、私からのお願いです。

本日は卒業おめでとう。皆さんの豊かな未来を祈念いたします。



平成23年度学部卒業式祝辞

名古屋大学総長 濱口 道成

皆さん、ご卒業おめでとうございます。名古屋大学は、本日ここに、平成23年度の学部卒業生2,211名に、学士の学位記を授与いたしました。卒業式を迎えた皆さんに、名古屋大学教職員を代表して、心からお祝いを申し上げます。大学での勉学を糧に希望に満ちて旅立ちされる皆さんをお送りすることは、私ども大学人にとって、最上の喜びであります。おめでとうございます。

さて、卒業式は、大学での生活を思い起こし、在学中の様々な出来事を改めて振り返る機会でもあります。皆さんの名大での学生生活は、どのようなものだったでしょうか。入学した時の期待通りのものでしたでしょうか。どんなことが、心に残っていますか。きっと、沢山の喜びと、多くの出会いにあふれていることでしょう。

振り返れば、皆さんが学生生活を過ごしたこの4年間は、日本にとっても、世界にとっても、大きく価値観が変換する時代でした。私たちは今、明治・終戦後に続く第3の時代の転換点に生きていると思います。この4年間、様々な出来事がありました。とりわけ我々に衝撃を与えたのは、昨年、東日本大震災でした。お祝いの式典ではありますが、皆さんの卒業式にあたり、この大震災のもたらした意味について、改めて考えてみたいと思います。

何故震災について考えるのか、何故だと思えますか。

それは、今日の卒業式が、皆さんが、社会人として、一市民として自立し、社会貢献を求められる立場になる節目の意味を持つからです。もちろん皆さんの中には大学院に進学される方もいますが、社会人としての自覚と立場を求められる点では同じだと思えます。これまでの大学までの生活は、一人の市民として生活していくにあたって、いわば助走にすぎません。皆さんにとって、自立した本格的な人生は、これから始まります。その出発点にあたって、皆さんに、今日本が体験しているこの困難を直視し、一人ひとりの立場で考えていただきたい。これが、今日卒業を迎える皆さんに、まず私がお願いしたい事であり、震災について考えてみたい理由です。

今回の災害発生にあたり、名古屋大学は東日本大震災対策本部を立ち上げ、医師の派遣、支援物資の発送、そして義援金を集める活動を行ってきました。また、震災に関するシンポジウムを9回開催し、市民とともに震災について議論を深めてきました。医療団の派遣は、150人を超え、先日33番目のグループが名古屋に戻ってきたばかりです。



現地では、まだ様々な困難を抱え、厳しい生活を送っておられる方が多数いらっしゃいます。また、皆さんの中にもボランティアで現地へ出かけられた方が多数いらっしゃいます。

さて、東日本大震災の発生以来、私は折に触れて、アンドレ・ジイドの言葉を思い起こします。それは、「毎日平凡な事を、平凡に行うことは、非凡である」という言葉です。40年以上前の事です。この言葉を読んだ時は、詭弁的な表現に思え、心理的に抵抗を感じました。しかし、大震災の後、この言葉が繰り返し心に浮かびます。「毎日平凡な事を、平凡に行うことは、非凡である」この言葉は、誠実な毎日を送ることのむずかしさを意味していると思いますが、一方で一見平凡に見える毎日が、実はかけがえのない時間である事も示しているように思います。

皆さんが、今日の卒業式を迎えるまでの22年間余りの生活は、一見平凡なものに見えていても、実はかけがえのない生活であったと言えます。そして、この幸福は、君たちのお父さん、お母さんはもちろん、多くの人々の支えによって実現したものでもあります。だから、私たちは、幸福であることへの責任があると言えます。大震災を振り返り、改めてかけがえのない存在として、家族、友人を大切にすること。そして、毎日毎日を真剣に、誠実に生きる事が求められています。そして、平凡に思える毎日が、実はかけがえのない幸福である事を改めて実感していただくとともに、自分の幸福を自分だけのものにしてしまうことのないようお願いします。名古屋大学を卒業する今日、改めてあなた自身の志を立てていただきたい。自分がどうしたら社会の役に立てるか、自分の仕事に専念する中で、人々の幸福を支えることができるか。これから就職する方々は、現場に出てみると、毎日の仕事がつまらない、飽き足らないものに見える事があるかもしれません。しかし、すぐにあきらめることなく、平凡に思える仕事の連続の先にある非凡を冷静に描き、誠実に自分なりの人生を送っていただ

きたいと願います。

さて、今日、大震災に関して、もう少しお話ししたい事があります。1つは、日本の文化の力についてです。今回の東日本大震災にあたり、私は海外の友人から多数のメールを受け取りました。メールの中で、彼らが異口同音に述べている事は、被災された日本人の静かな強さ、お互いを思いやる心、です。そして、彼らは言います。きっと日本は復興できるだろう、と。皆さんも実感されていると思いますが、私は小さな子どもの中にもその姿を見るように思います。そして、悲劇の中ではありますが、改めて日本の持つ文化の粘り強さを海外の友人から教えられた思いがします。

2つ目は、海外からの支援についてであります。震災後、名大の連携している海外の大学を訪れる機会が何度かありましたが、多くの国々が、日本に様々な支援をされている事に驚きました。例えば、モンゴルでは公務員の方々が、自分の給料の1日分を寄付されました。私たち日本人は、これほどまでに海外の友好国から熱い支援を頂いた事を、忘れてはいけないと思います。またこの支援は、日本が長年にわたり友好国と連携し、幅広い活動を行ってきたことへの、感謝であるとも言えます。日本は決して孤立していません。また、この体験から、グローバル化の時代を迎え、海外での日本の活動が益々重要になっていることを理解していただきたいと思います。

3つ目は、今日本は少子高齢化時代を迎え、また長期にわたる不況の中、大震災を体験し、厳しい時代を迎えてい

ます。この急速に進展する少子高齢化は、人類社会の中で、日本が初めて体験する困難です。また、東日本大震災と比較される災害に1755年におきたリスボン地震があります。この地震とそれに続く大津波によって、ポルトガルの経済は壊滅的な打撃を受けたと歴史に記されています。

さて、日本は今直面する困難を超え、発展できるでしょうか。もちろんリスボン地震の時代と、社会経済の仕組みは大きく違っています。しかし、世界は、日本の活動を見えています。日本は、この困難を超える事が出来るのかと。私は、大丈夫だと思います。なぜなら、日本は今まで多くの困難を体験してきました。関東大震災や戦後の荒廃、この地方を襲った濃尾地震など。その中で、日本人は学習し、対策を深め、科学技術を磨く事により、日本は立ち直ってきました。震災後、確かに復興はゆっくりとしていますが、日本経済は決して壊滅的な打撃を受けてはおりません。確かに少しずつではありますが、回復しつつあることが実感できると思います。今私たちは、劇的な体験ができる時代を生きているのかもしれませんが。それは、我々が今抱えている様々な困難を超え、日本の文化の持つ力強さを示す時代、言い換えれば様々なやりがいと可能性に満ちた時代を生きているのかもしれませんが。そして、その可能性を現実にする力は、君たち若者の中にあります。これから皆さんが、多くの方と出会い、成長し続け、新しい時代を切り開く原動力となっていただける事を、祈ります。

本日は卒業おめでとう。



来賓祝辞（大学院修了式）

柴田 昌治 名古屋大学全学同窓会副会長
日本ガイシ株式会社相談役

全学同窓会を代表いたしまして、皆様に心よりおめでとうと申し上げます。今日皆さんが学位をもらわれている姿を見ていて、私は卒業してから53年になるのですが、このような立派な講堂がありませんでしたし、入学して初めは昔の八高の校舎の中で2年間、それから名古屋城の中の昔軍隊があったところに2年間、という名大ライフを送って社会に出てきたので、皆さんがこのような素晴らしい環境で育ったのを、うらやましいというふうに思います。

少し全学同窓会についてお話をさせていただきます。約10年前の平成14年、名古屋大学の卒業生は10万人を超し、卒業生と大学との連携が必要だということで、トヨタ自動車の名誉会長である豊田章一郎さん以下のメンバーで当時の総長と相談しまして、旧七帝大の国立大学の中では名古屋大学が一番最初に全学の同窓会を作りました。それまでは、法学部なら法学部、医学部なら医学部、という結びつきはあったのですが、全学の同窓会というのはなかったので、全学の、皆さんが卒業した後には心の拠り所となる同窓会を作って、いつまでも名古屋大学の卒業生であることに誇りを持って、グローバル時代に対処していけたらいいということが狙いでございます。現在国内には関東・関西支部と遠州会が、海外には韓国、台湾、中国の北京と上海、モンゴル、ベトナム、ウズベキスタン等に10か所の拠点がございまして、これから皆さんが卒業されて、それぞれの国における支部と色々なケースでコンタクトを取られることがあると思いますけれども、是非このことを覚えておいていただきたいと思っております。

今日学位を受けられた1,963名の中で、約8割近い方が就職をされ、残りの方はさらにマスターなりドクターなりの勉学の道へと進まれるわけですが、今の日本が置かれた状況というのは、先ほどの濱口総長の中にもありました通り、決して優れた状態にあるとは言えません。つまり世界の人々が日本を見る目がだんだん冷たくなってきている。大震災については今日は時間がございませんのであまり触れませんが、私が1999年から10年間出席してまいりましたダボス会議において感じたことをお話しいたしま



す。この会議は世界各国のリーダー2,500人ほどがスイスのダボスに集まって、それぞれの世界の状況、例えば経済問題や核の不拡散について議論する場であるのですが、私が最後にダボス会議に出た時は、日本に関するテーマというのはたった一つで、しかもその日本に関する分科会というのは、「Japan: A Forgotten Power?」、つまり「日本は忘れられた大国なのか」というテーマでした。なぜ世界第2位あるいは第3位の経済大国でありながら、世界の中で「Forgotten」という情けない話になったのかということをよく考えてほしいと思います。その後は、日本の首相などもほとんど出席をしておらず、日本の国として世界平和や世界経済に対してどうContributeするかという提案が非常に少ないわけで、今年も野田首相がビデオメッセージを送ったような状況でございます。

今の世界の情勢についてちょっと触れ、それから卒業していく皆さんに、先輩として贈りたいことを話してまいります。

まず、総長の祝辞にありましたように、国際経済あるいは国際社会というのは、アメリカにパワーが一極集中していた状況から、EUやBRICsと呼ばれるブラジル、ロシア、インド、中国といった新興国のポジションが変化してきており、今や多国籍で取り組まないと国際問題は片付きません。また、世界のほとんどの成長は中国、インドをはじめとするアジアにあるというふうに状況が変化をしております。そうした状況の中、是非皆さんにお願いしたいのは、「グローバル・アイ」を持ったプロフェッショナルな国際人であってほしいということであり、「グローバル・アイ」を持つというのは、仕事であれ研究であれ何であれ、日本国内の狭い範囲でものを見るのではなく、世界の自分

と同じような立場に置かれた人は一体何を考えているのかと、常に国際比較をする姿勢を身につけてほしいということです。

それから、プロフェッショナルというのはどういうことか。これは、やはり総長の祝辞にありましたように、本日卒業される1,963名のうち76パーセントの人が就職されるわけですが、今、日本では大学の卒業生の約30パーセントが3年間に職を辞めてしまうという統計が厳然としてあります。名古屋大学の数字はそれほど高くないとは思いますが、全国の大学の卒業生のうち3割はあつという間に仕事を辞めてしまう。しかし、我々のような企業の側から見ると、皆さんが考えているほど新しい卒業生が企業社会あるいは機関の中ですぐに戦力となるのではないわけです。ですから3年なり5年なりは十分辛抱をして、もし苦しいことがあれば、名古屋大学で作った大事な親友や家族と相談し、どういう状況なのかということを観客的に見て判断をしてもらいたい。石の上にも3年という言葉がありますが、いきなりプロフェッショナルな人材になるわけではないですから、やはり3年から5年は辛抱して、自分に与えられた仕事の中に、喜びと、そして苦しい場合には、これは自分に与えられた試練だと前向きに捉えて、頑張ってもらいたいということでもあります。

「グローバル・アイ」を持ったプロフェッショナルな国際人とはどういうことかと申しますと、英語ができる、フランス語ができる、ドイツ語ができる、中国語ができる、といった語学の問題ではなくて、世界の人々と向き合った場合に、自分の国の伝統、文化をきちんと相手に説明をし、また相手の国の文化、伝統に十分耳を傾けて、お互い対等な立場でディベートができる。こういう人を国際人というのでありまして、グローバル社会で少し日本人に対する世界の目が冷たくなっている、つまりだんだん関心を持たれなくなっているということをよく考え、それをもう一度、ここにおられる若い皆さんの力で世界に尊敬されるような国に育て上げていただきたいと思います。

日本の国際競争力は、20数年前までは、スイスのIMDというインスティテュートが毎年発行する国際競争力年鑑

で、ずっと1位または2位でした。アメリカと日本が常に1位であり2位という時代が続いていたのですが、20年前からだんだん落ちていって、現在は59カ国中26位であります。これはどういうことかと考えますと、この国際競争力は、政治や社会の安定性、ビジネスの効率性、インフラストラクチャーといった項目で成り立っているものでありまして、日本の順位がこんなに急激に下がったのは、世界からそのように見られているだけではなく、国際競争力が現実には落ちてきているということを意味します。

そこでたった一つ希望があるのは、日本の科学技術に対する投資、あるいは企業や大学が新しい技術開発、研究に使っているお金は相変わらず世界で2位や3位という順番にあるということでもあります。特に今日修士や博士学位を取られた人たちは、自分たちが日本の将来を担っていくんだという「シンク・ポジティブ」の前向きの精神で取り組んで、是非日本をもう一度、国際競争力26位から1位に、これはそう簡単な話ではなくいろんな問題があるわけですが、その問題を解決する一翼を担って頑張りたいと先輩としてお願いをしたいと思います。皆さんの卒業、学位授与のおめでたい席で、もう一度最後に卒業生を代表しておめでとうという言葉を送りながら、是非「グローバル・アイ」を持ったプロフェッショナルな国際人になっていただきたいということをお願いいたします。私の祝辞とさせていただきます。

ご静聴ありがとうございました。



来賓祝辞 (学部卒業式)

柴田 昌治 名古屋大学全学同窓会副会長
日本ガイシ株式会社相談役

皆さん、卒業おめでとうございます。2,211名のうち、実際に就職される方は41パーセントの900名ぐらいで、他の1,300名余りは修士課程でさらに勉学の道を歩かれるというふうに伺っておりますけれども、私が全学同窓会という立場で、皆さんに全学同窓会とはどういう活動をしていて、今後皆さんとどういう関わりがあるのかということについてお話し申し上げ、そのあとに先輩として皆さんに贈る言葉をお話ししたいと思います。

全学同窓会というのは、旧7帝大の国立大学の中では名古屋大学が一番早く、今から10年前の平成14年、大学と卒業生との連帯を図りたいということで、トヨタ自動車の豊田章一郎名誉会長を会長としてみんなで作り上げた組織であります。名大の卒業生というのは、もう10万人を超しております。組織としては国内に関東・関西支部と静岡の遠州会があり、海外には中国の北京と上海、あるいはウズベキスタンやベトナム、タイ、モンゴルなど、既に10カ所の支部ができております。今後皆さんがこれらの国に赴任された時など、仮に何らかの障害があった場合、それぞれの国で活躍される名大の先輩にコンタクトをとることによって、何らかの前進が出てくるケースがあるかと思っておりますので、この全学同窓会の組織について、卒業される機会に一度見ていただきたいというのが、全学同窓会の立場でございます。

さて、先ほど濱口総長から、皆さんに贈られる言葉として、震災の問題と絡めていろいろとお話があったかと思っておりますけれども、私からは先輩として皆さんにお伝えしたいことがいくつかあります。

まず1つは、今、日本がどのように海外から見られているか。このグローバル化の時代に、海外の日本に対する目というのは非常に重要であります。かつては日本という国は世界の中で経済大国であり、あるいは新しい製品をどんどん世界に提供する国として、あるいは非常に勤勉な国民として、かなりリスペクトされておりました。ところが今は残念な状況にあります。例えば、私は1999年から10年間、ダボス会議という会議に出席しておりました。



これは、スイスのダボスという小さなスキーリゾートの町で、毎年世界各国のリーダーが約2,500人ほど集まって世界の問題について考える会議なのですが、私が出席していた最初の頃は、200余りの分科会のうち日本についての分科会というのは非常にたくさんありました。ところが、つい2年前はたった1つしかなくなってしまって、あげくにそのテーマは「Japan: A Forgotten Power?」、つまり「日本は忘れられた大国なのか」という非常に情けないもので、なぜ日本は世界からそんなに認められない国になったかというディスカッションで非常に冷たい目で見られ、がっかりした記憶がございます。

スイスにあるIMDというシンクタンクが出している国際競争力年鑑で、今から約20数年前までは、日本はアメリカと並んで世界1位または2位で国際競争力の非常に高い国として挙げられておりましたが、昨年は残念ながら59カ国中26位まで落ちてまいりました。1位か2位であった国が現在26位。つまり59カ国中の真ん中まで落ちてきたということは、日本に対する世界の目はそれほど厳しいということです。かつては世界中にその優秀性を認められた各種のエレクトロニクスの技術ですら、すでに韓国、場合によっては中国、台湾、インド等の新興国に後れを取りつつある時代であります。これを何とかして、皆さんに立て直してもらわなきゃいかん。それにはやっぱり若い人が中心になってリードしていく日本でなければいけないと思っております。そういう面で先輩として、皆さんにどういう人間になっていただきたいかと申しますと、先ほどの総長の話にもありましたように、まずグローバルな視点を持った国際人になっていただきたい。「グローバル・アイ」を備えたプロフェッショナルな国際人になっていただきたいということでもあります。

この中で約900名の方が卒業して社会に出るわけですが、今、日本の大学生の30パーセントが就職をして3年間に離職をします。前には全く考えられなかった高確率であります。先ほどの総長のお話にもあったように、学生からビジネス社会に出ますと、最初に与えられる仕事というのは、自分の期待に比べて平凡であり退屈であり、場合によってはどうして私はこんな仕事にしか就けないのだろうと悩む時代があると思いますけれども、それは誰もが通り過ぎた道であって、プロフェッショナルな国際人にはそう簡単になれるわけじゃありません。ですから最初の仕事がいかに辛くても、たまには、この大学で学んだ友人たちと話をし、情報交換をして、辛いところを乗り越えていくということがないと、気に入らないからとすぐに仕事を変えるというのは、名大の誇りを持った卒業生には是非やっていただきたいことでもあります。最初任されるのは、誰でも退屈な、場合によっては非常にシンプルな仕事かもしれません。でもそれは皆さんが将来、大成するための我慢の時期であり、その我慢の時期をじっと耐えるということが非常に大事だと思います。

それからもう一つ、グローバルなアイというのはどういう意味かということをもう一度申し上げますと、日本の国際競争力は下がってきているわけですが、今後、仕事をする人、あるいは学校に残ってドクターコースなりマスターコースなりに進む人も、自分と同世代の海外の若者が一体どういうことを考えているのか、自分の今やっていることはアメリカなり中国なりインドではどのようにしているのだろうと考え、グローバルな感覚を身に付けていくことで、やがて立派な社会人になれるということでもあります。先ほど、大学院の卒業式で、約1,900名の人の中で留学生が275名いらっしゃると聞きましたけれども、そういう人たちは、先ほど申しあげました全学同窓会の10支部で、もうそれぞれ相当な地位に就いていらっしゃり、国の次官であったり、あるいは教授であったり、ソサエティーの中でリーダーシップをとった活動をしていらっしゃいます。そういう人に負けないよう、是非皆さんも、「グローバル・アイ」を身に付けたプロフェッショナルな国際人になっていただきたいと思います。国際人というのは英語

が、あるいは中国語が上手だということだけではだめで、自分の国の伝統、文化を海外の人に分かるように説明ができ、それから相手の国の伝統、文化というものをちゃんと自分なりに聞き、そうして対話をできる人というのが国際人なのでありまして、是非そういうことを心掛けていただきたいと思います。

いずれにしても、若い皆さんが、世界的に見るとやや衰えてきた日本を、もう一度世界の中の一流国に戻すために頑張ってくださいと思います。国際競争力年鑑の中で、日本の科学技術に対する投資額は相変わらず世界の2位でありますし、あるいは会社の研究開発に対する投資額というのも2位か悪くても3位であります。ですから何も絶望して、どんどん落ちていく日本というふうには思っておりませんで、これからの日本を支える人材である皆さんが、それぞれの立場で、もう一度、「グローバル・アイ」を持ったプロフェッショナルな国際人として羽ばたいていただくようお願いをしまして、先輩として皆さんに贈る言葉とさせていただきますと思います。

本日は誠にありがとうございました。



平成23年度「赤崎賞」授賞式を挙

平成23年度「赤崎賞」授賞式が、3月8日(木)、豊田講堂第5会議室において挙行されました。同賞は、赤崎 勇特別教授より本学に寄贈された京都賞を受賞された際の賞金を基金として昨年度から設けられた顕彰制度で、本学の若手研究者に対して、「学」を中心とする「産学官」連携を通じた研究開発の重要性と、科学の発展と社会に多大な貢献をした赤崎特別教授の偉業を広く伝えることを目的としています。

本学に在籍する当該年度の4月1日時点で35歳以下の学生及び研究者で、学術・科学技術分野で将来的な発展や可能性が期待でき、本学の学術・科学技術水準の高さを内外に知らしめることができる研究を行っている方を対象に選考しており、昨年10月から募集を始めて、産学官連携推進本部長である宮田理事らを委員とした赤崎特別顕彰審査委員会で厳正な審査を行いました。9件の個人、団体からの応募があり、慎重な選考の結果、吉川浩史理学研究科助教及び榎田 啓工学研究科講師が選ばれました。

吉川助教の研究テーマは「分子クラスターを正極活物質とする新しい二次電池の開発」で、近年、地球規模での環境問題などから、高容量かつ急速充電可能な次世代二次電池の開発に注目が集まっている中、分子クラスターを正極材料とする新しい二次電池「分子クラスター電池」の開発に着手して、従来のリチウムイオン電池よりも大きな電池容量を見だし、分子クラスターが次世代電池の有望な正



赤崎特別教授（中央）を囲んでの記念撮影

極活物質となることを示すとともに、その発展として分子クラスターと単層カーボンナノチューブからなるナノ複合材料を作製し、従来に比して大きな電池容量と数倍早い急速充電を達成したことが評価されました。

榎田講師の研究テーマは「機能性核酸の創製を目指した人工塩基対の開発」で、DNAにおける4つの塩基を非天然分子による「人工塩基対」に置き換えた人工DNAを化学的に合成することにより、高感度遺伝子検出材料や高輝度蛍光ラベル化剤、ナノ構造体の構造材料など、天然のDNAが持ち得ない機能を持った材料を開発したことが評価されました。

授賞式では、濱口総長のあいさつの後、宮田理事から受賞者の発表と講評があり、次いで、赤崎特別教授から受賞者に正賞の表彰状と、副賞の賞金50万円が贈呈されました。

受賞者の2人は、それぞれ、自分たちの研究が本学の学術研究のさらなる向上の一端を担うことにより、赤崎特別教授の功績に少しでも近づけるよう努力を重ねたい旨、受賞の喜びと赤崎特別教授に対する尊敬の念を込めた謝辞を述べました。



吉川助教への賞状授与の様子



榎田講師への賞状授与の様子

濱口総長が第2回日越学長会議に出席

濱口総長が、3月12日(月)、13日(火)の両日、京都大学百周年時計台記念館他において開催された第2回日越学長会議に出席しました。

同会議は、京都大学とベトナム国家大学ハノイが幹事校となり、2年毎に日本とベトナムの交互で開催されており、今年は京都大学を幹事校として開催されました。日本



集合写真

側は、41大学の他、文部科学省及び日本学術振興会から、ベトナム側は、20大学の他、ベトナム教育訓練省及び駐日ベトナム大使館から、合計約170名が出席しました。

12日(月)は、初めに松本 紘京都大学総長及びマイ・チョン・ニュアン ベトナム国家大学ハノイ学長により開会あいさつが、ドアン・スアン・フン ベトナム大使、森口泰孝文部科学次官、ブイ・ヴァン・ガ ベトナム教育訓練省次官、戸渡速志日本学術振興会理事により来賓あいさつが行われ、その後、奈良人司文部科学省高等教育審議官、ファム・チ・クオン ベトナム教育訓練省国際教育局審議官、ニュアン学長、松本総長からそれぞれ基調講演がありました。午後からは、「21世紀における大学に必要な課題」、「教育協力と質保証」、「高度職業人材養成のために必要な大学制度の発展」の3つの分科会に分かれて議論が行われ、総長は「21世紀における大学に必要な課題」の分科会において、ドアン・クアン・ヴィン ダナン大学副学長とともに共同議長を務めました。

13日(火)の全体会合では、各分科会からの報告をもとに全体で議論が行われ、日越の学术交流・学生交流の促進について、活発な議論が行われました。

佐分理事がウズベキスタンを訪問し人材育成に関する国際会議に出席

佐分理事が、2月15日(水)から20日(月)までの間、ウズベキスタン・タシケントを訪問し、国際会議に出席しました。同会議は、国家の発展及び近代化のための重要項目である教養・知的レベルの高い人材の育成をテーマとして開催されたもので、佐分理事が、濱口総長の代理としてウズベキスタン高等・中等専門教育省からの招待を受けて出席



集合写真

しました。

17日(金)にタシケントのパレス・オブ・シンポジウムで行われた同会議には、アジア諸国を始め欧州、北米、アフリカ諸国など40以上の国・機関から、300名以上の参加者がありました。

会議はイスラーム・カリモフ ウズベキスタン共和国大統領の歓迎スピーチで幕を開け、黒田東彦アジア開発銀行総裁の開会あいさつに続き、全体会議が行われました。午後は6つのセッションに分かれ、各国の代表が事例発表と意見交換を行いました。

会議に先立ち、16日(木)の午前にはタシケント市内にある小・中学校、高等学校、大学等、ウズベキスタンの主要な教育機関を視察し、会議後の18日(土)には、サマルカンドへ移動し同様の視察を行いました。

佐分理事はその他、滞在中に、本学のウズベキスタン事務所及び日本法教育研究センターを訪れ、関係教職員との意見交換を行いました。

第1回 G30国際プログラム紹介のための交流イベントを開催

第1回 G30国際プログラム紹介のための交流イベントが、2月16日(木)、ES総合館において開催されました。同イベントは、国際化拠点整備事業(グローバル30:G30)の国際プログラムを周知し、G30の学生との交流を促進することを目的に、日本有数の企業11社より人事担当者13名を招いて実施されたものです。



意見交換の様子

初めに、渡辺副総長が開会のあいさつを行い、次に、今井千晴 CDO コーディネータが G30 国際プログラムとキャリア形成支援活動を紹介しました。続いて G30 の学生 2 名が、過去に取り組んだ様々な課外活動や本学での学生生活及び将来のビジョンについてプレゼンテーションを行い、目標達成へ向けての行動力や目的意識の高さ、将来のグローバル人材としてのポテンシャルの高さをアピールしました。

後半は、企業の人事担当者と G30 の学生が座談会形式で意見交換を行いました。人事のプロフェッショナルからキャリア形成について貴重なアドバイスを受け、学生らは熱心に話を聞いていました。最後に、ゴウ・ヨシダ国際企画室特任教授が開会のあいさつを行い、「これから本格化するキャリア形成支援活動やインターンシップの充実へ向け、大学と企業の連携が重要である」と述べ、大学と企業の更なる協力体制強化の必要性を訴えました。

人事担当者からは、「これからの成長が楽しみです」、「将来彼らを受け入れる企業側の意識改革も必要と改めて感じました」などの感想が寄せられ、相互に良い刺激を与え合う実り多きイベントとなりました。

「知財ポートフォリオ形成モデルの構築事業」の成果報告会を実施

「知財ポートフォリオ形成モデルの構築事業」の成果報告会が、2月16日(木)、愛知県産業労働センター「ウインクあいち」において、名古屋工業大学、産業技術総合研究所との共催で実施されました。

同事業は、文部科学省の大学等産学官連携自立化促進プログラム「機能強化支援型」の支援を受け、複数の大学、



報告会の様子

研究開発法人の連携による知財ポートフォリオ形成を通じて、知的財産戦略を展開できる体制の整備と、国内外へ技術移転可能な知的財産群の創出を図るものです。具体的には、東海広域での知的クラスター創成事業をはじめとして、ナノテクノロジー・材料分野で名古屋工業大、岐阜大、三重大、名城大及び本学が保有している特許について、同研究所の支援を受けて特許ポートフォリオ形成を行い、応用分野別に強い特許網の構築と活用を目指したもので、自立化に向け、知的財産の戦略的活用を重視した高度な知財マネジメント体制への脱皮を図るべく、各種新モデルや新手法の研究に取り組んでいます。

当日は80名の参加があり、同事業の取り組みの具体的な内容及びその成果を報告しました。また、報告に先立ち、高橋真木子理化学研究所研究戦略会議研究政策企画員から「知財創造プロセスとしての産学連携活動、及びそれにかかる人材「リサーチアドミニストレータ」について」と題して、矢口太郎恵泉国際特許・法律事務所弁理士から「研究開発型知財パッケージ化・ポートフォリオ化による国際学学連携を通じた商業化の促進」と題して、招待講演がありました。

産業技術総合研究所との連携・協力協定記念講演会を開催

産業技術総合研究所との連携・協力協定記念講演会が、3月5日(月)、レセプション名古屋通信会館において開催されました。これは、本学と独立行政法人産業技術総合研究所が連携・協力協定を締結して5年が経過したことを記念して開催されたもので、一般の方を含め86名の参加がありました。



講演会の様子

同協定は、産業の持続可能な発展を支える環境配慮型の「材料を基盤とするものづくり」に関わる研究を通じて、我が国の学術及び産業を振興することを目的としており、同目的のために、両機関間での共同研究並びに客員教授・客員研究員の相互交換等を継続してきました。

講演会開催にあたり、宮田理事、上田完次産業技術総合研究所理事から開会あいさつがあり、続いて、斎藤永宏グリーンモビリティ連携研究センター教授より、「グリーンモビリティ社会の形成と次世代技術・産業」と題し特別講演が行われました。その後、材料分野を中心とした3件の共同研究の成果が紹介され、充実した内容の発表に、参加者から強い関心が寄せられていました。

今回の記念講演会を契機とし、両機関が、引き続き互いの得意分野の技術・研究を補完しながら、共同研究等を推進することが期待されます。

留学シンポジウムを開催

留学シンポジウムが、3月15日(木)、文系総合館カンファレンスホールにおいて開催されました。同シンポジウムは今回で4回目となり、これまで焦点を当ててきた「留学体験談」から一歩踏み込み、「留学がその後の人生にどう役立つのか」をテーマとしました。

シンポジウムは2部制で行われ、初めに、濱口総長より、



シンポジウムの様子

学生である間に海外へ出ることの意義、そして本学学生に期待することについて話がありました。第1部では、「留学のその後、そしてこれから」と題して、3名の留学経験者から個別発表が行われました。

続く第2部では、岩城奈巳留学生センター准教授の司会のもと、「留学は人生にどう役立つ？」をテーマとしてパネルディスカッションを行い、4名のパネリストにより活発な意見交換が行われました。

学内の学生・教職員や、他大学から約80名が参加し、有意義なシンポジウムとなりました。

平成23年度卒業・修了留学生を送る夕べを開催

平成23年度名古屋大学卒業・修了留学生を送る夕べが、3月15日(木)、南部食堂1階において開催されました。これは、今春、卒業・修了して、就職や帰国するなどで本学を巣立っていく留学生の今後の活躍を願い、本学での思い出の一つとなるよう開催されたもので、留学生と、日頃お世話になっている留学生関係団体、留学生関係教職員など



あいさつする総長

約150名が参加しました。

最初に、濱口総長から激励及び祝福のあいさつがあり、次いで、来賓を代表し、正田財団法人NGK留学生基金事務局長から祝辞がありました。続いて、宮田理事の発声により乾杯が行われ、総長や教職員、留学生関係団体の方々を囲んでなごやかに歓談したり、記念撮影したりする留学生の姿が、あちらこちらで見受けられました。

歓談後、名古屋大学留学生後援会からの記念品が、後援会会長である濱口総長から、各部局の卒業・修了代表者へ手渡されました。これに対し、卒業・修了留学生を代表して大学院経済学研究科博士課程前期課程2年の陳 娯さん(中国)から、日本への留学の感想を含めた謝辞が述べられました。

最後に、杉山理事から閉会のあいさつがあり、盛況のうちに終了しました。

理学研究科博士課程後期課程3年の小山さんが日本学術振興会育志賞を受賞

大学院理学研究科博士課程後期課程3年の小山さんが、第2回日本学術振興会育志賞を受賞しました。

同賞は、将来我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な博士課程の学生を顕彰することで、若手研究者の養成を図ることを目的として平成22年度に創設され、社会的に厳しい経済環境の中で勉学や研究に励んでい

る若手研究者を支援・奨励するための事業の資として、平成21年に天皇陛下から御下賜金を賜り実施されています。

第2回となる今年度は、全国の大学・学会から推薦された120名の中から、17名が受賞者として決定されました。

なお、授賞式は、3月1日(木)、東京都の日本学士院において挙行されました。



総長に受賞報告する様子



記念撮影(左から小山さん、総長)

2011年度学生論文コンテストの表彰式を挙

2011年度学生論文コンテストの表彰式が、2月29日(水)、高等教育研究センターにおいて開催されました。

同コンテストは、学部学生に「論理的な文章を書く経験」を奨励することを目的として毎年開催しており、今回は応募された21本の論文の中から、山本理事、松浦附属図書館長、戸田山教養教育副院長、木俣高等教育研究センター



記念撮影

長による厳正な審査の結果、4作品が優秀賞に選ばれました。受賞した論文は、本学の成果物として名古屋大学学術機関リポジトリに登録されます。

優秀賞・附属図書館長賞

「なぜ日本人は世界一素晴らしい医療に世界一不満を持つのか？」

医学部1年 田中健一さん

優秀賞

「障害者に対する職場内ハラスメントと今後の対策」

法学部1年 朴 鎮洙さん

「暴力の時代における情念の浄化装置としての絵画」

医学部4年 山田悠至さん

「J-POP から見る若者の心象風景～『逢いたいソング』についての考察」

教育学部1年 高井崇佑さん

光速度不変の原理への挑戦

田島 宏康 太陽地球環境研究所教授

最近、名古屋大学理学研究科のグループが関わるCERN(欧州原子核研究機構)の実験で、ニュートリノという素粒子の速度が光の速度を超えていることを示唆する結果が大きな話題を呼んでいます。このような光速に関わる問題は、物理学の基礎理論であるアインシュタインの相対性理論の根幹をなすため、様々な角度から検証実験が実施されています。それらの実験の内の一つが、我々のグループが取り組む「光速度不変原理」の検証です。光速度不変の原理では、光やガンマ線を含む電磁波の速度は真空中では観測者の速度に依存せず不変とされています。しかし、重力を記述する一般相対論と素粒子の振る舞いを記述する量子力学の統一を目指す量子重力理論では、プランクスケールと呼ばれる空間の極微スケール (10^{-33} cm) において真空は構造を持ち、それに対応するエネルギースケール (10^{19} 電子ボルト、陽子の質量エネルギーの100億倍に相当) に近づくと、その空間構造との干渉により光の速度が減速することを導く理論の枠組みも存在します。すなわち、光速

が光子のエネルギーに依存することになります。ただし、この速度差は我々が作り出せる光子(ガンマ線)のエネルギーでは極めて微小であるため、地上の実験で実現できる距離では、光子の減速による遅れは測定が困難であり、未だ量子重力理論の検証には至っていないのが現状です。

このような状況で、“ガンマ線バースト”(図1参照)と呼ばれる天体現象が量子重力理論の検証に有効であると注目を集めていました。ガンマ線バーストは、宇宙のどこかで非常に高いエネルギーの光子(ガンマ線)が一秒以下から数十秒という短い時間に大量に放出される現象です。ガンマ線バーストの正体についてはまだはっきりとは解明されてはいませんが、その多くは10億光年以上という極めて遠方で発生した爆発的現象であることが分かってきました。ガンマ線バーストは、遠方で短時間に高いエネルギーの光子を放射するため、光速度のエネルギー依存性の検証には最適な光源でもあります。2008年に日本・アメリカ・フランス・イタリア・スウェーデンの国際共同開

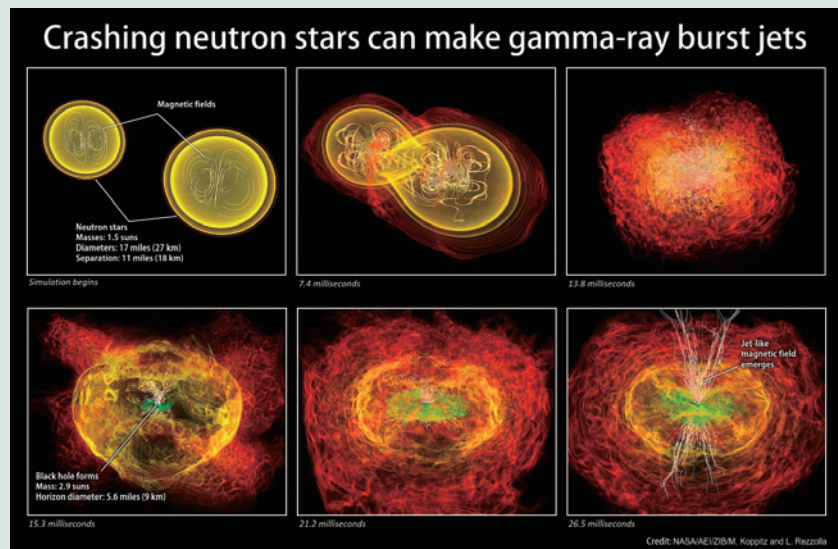


図1 ガンマ線バースト発生過程をシミュレーションした図。今回観測されたような発光時間が短いガンマ線バーストは、中性子星やブラックホールの連星が融合する時に発生すると考えられています。この融合によって発生するブラックホールに物質が落ちていく時に発生するジェットが観測者の方向に向いているとガンマ線バーストとして観測されます。(図はNASAより引用)

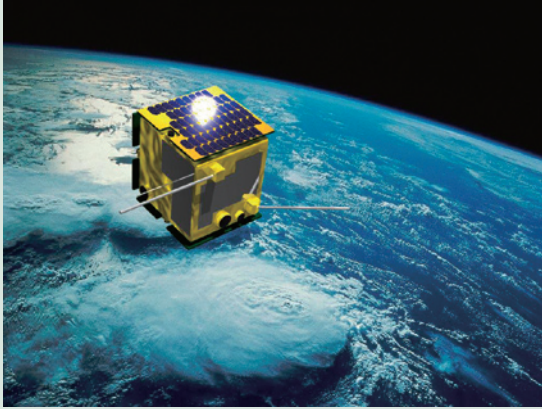


図2 フェルミ・ガンマ線宇宙望遠鏡の概念図。4×4に配列された検出器モジュールの一つの中身である浜松フォトニクス製の半導体検出器が見えるように描かれている。この検出器中で反応したガンマ線によって生成される電子と陽電子の飛跡を測定してガンマ線の到来方向を決定する。(図は NASA より引用)

発によって打ち上げられたフェルミ・ガンマ線宇宙望遠鏡(図2参照)は、2009年5月10日に73億光年の遠方で発生したガンマ線バーストを観測しました。このガンマ線バーストでは、310億電子ボルトという非常に高いエネルギーの光子を検出しましたが、その到達時間が低いエネルギーの光子に比べて、大きく見積もっても高々0.83秒しか遅れていないことを観測しました。量子重力理論の幾つかの枠組みでは、それ以上の遅れを予測するため、我々の観測結果と矛盾します。今回の結果はそのような枠組みを全て棄却することになり、実証が極めて困難だと考えられていた量子重力理論に対して、観測結果から極めて厳しい制限を課すことに初めて成功しました。

このように宇宙からの光子(赤外線、可視光、紫外線、X線、ガンマ線など)を大気の影響を受

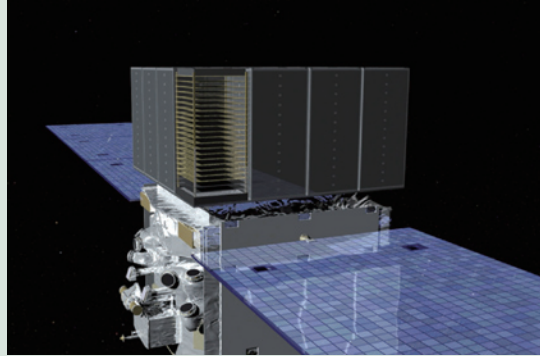


図3 名大が中心となって開発を進める小型衛星「ChubuSat-1」(金鯨1号)の想像図。

けずに観測するためには、人工衛星が不可欠ですが、その開発には莫大な費用・時間を要します。また、人工衛星ではやり直しがきかないため設計が保守的となり、限られた重量・電力条件下で最適な性能を発揮することが困難になっています。このような事態を打破するため、我々は大同大学や中部地方の中小企業と共同で50 kg級の超小型衛星(図3参照)の開発を進めています。超小型衛星は数百kg以上の中・大型衛星と比較して、観測機器の搭載能力は制限されますが、開発費用は約1/100に抑制できるため、大型衛星ではリスクが高すぎる先進的・萌芽的技術に基づいた観測機器を短期間に開発・搭載することが可能となります。このような過程を経て開発された技術を利用することにより、大型衛星の観測性能や信頼性の向上につなげることができます。費用が1/100になれば、人工衛星の新しい産業利用を生み出す可能性が広がりますので、航空宇宙産業の中心地である中部地方の活性化に大きく寄与することを期待しています。

1963年、木曾川町生まれ。1991年名古屋大学大学院理学研究科で博士を取得後、米国カリフォルニア大学サンタバーバラ校で博士研究員、1996年より東京大学大学院理学研究科で助手。Bファクトリー実験で小林・益川理論を検証した後、2001年より米国 SLAC 国立加速器研究所で研究員、2009年より同上級研究員となり、フェルミ・ガンマ線衛星の開発、データ解析を通して宇宙線加速の謎に挑む。JAXA の次期 X 線衛星である ASTRO-H の軟ガンマ線検出器の開発責任者。2010年より現職。趣味は家庭菜園。

たじま ひろやす



「来たよ」「見たね」「勝ったぞ」—言語コミュニケーションにおける談話管理標識の働き

財布を落とした友人に声をかけるとき、「あ、財布落としたよ」は自然な言い方ですが、「あ、財布落とした」は不自然でごちない言い方に聞こえます。これは日常的に日本語を使う人なら誰もが共有する感覚ですが、その一方で、「『よ』ってどういうときに使うの？」と外国人に質問されてすぐに説明できる人はなかなかいないのではないのでしょうか。実は、日本語文法の専門家のあいだでも、「よ」「ね」「ぞ」といった終助詞の機能を正確に記述することは難問として知られ、多くの研究がなされてきたものの、まだ十分な理解は確立していません。

近年、言語表現の意味をできるかぎり厳密に、論理的な手法で定式化することを目標とする形式意味論という分野でも、終助詞や間投詞のような「具体的な意味ははっきりしないが、コミュニケーション上重要な役割を果たす」表現の機能への関心が高まっています。終助詞の意味を理解し、記述するのが難しい理由のひとつは、個々の終助詞に多様な機能があることです。例えば、ホームで一緒に電車を待っている友人に「寒いね」

という場合、「ね」は「相手がすでに『寒い』という認識を共有していることを、話し手が見込んでいる」ことを示す働きを持っていますが、「今何時？」ときかれて「ええと、3時だね」という場合、「ね」は「話し手が現場で考えたり調べたりした結果得られた情報を伝達している」ことを示すという、大きく異なった機能を果たしています。また、終助詞の意味機能は、イントネーションと密接に関わっています。冒頭で例にだした「あ、財布落としたよ」は「ご飯食べた？」と質問するときと同じ上昇調で発音されますが、「しまった！財布を忘れてきちゃったよ」ではイントネーションは下降します。

私達がことばを交わすときには、単に事実的な情報の提供や交換を行うだけでなく、終助詞やイントネーションによって、明示的に意識されないレベルで豊かな意思・情意の伝達が行われています。日本語を外国語として学ぶ人のための教材開発への貢献も視野にいれ、今後も終助詞をはじめとする談話管理標識の意味記述に取り組んでいきたいと考えています。

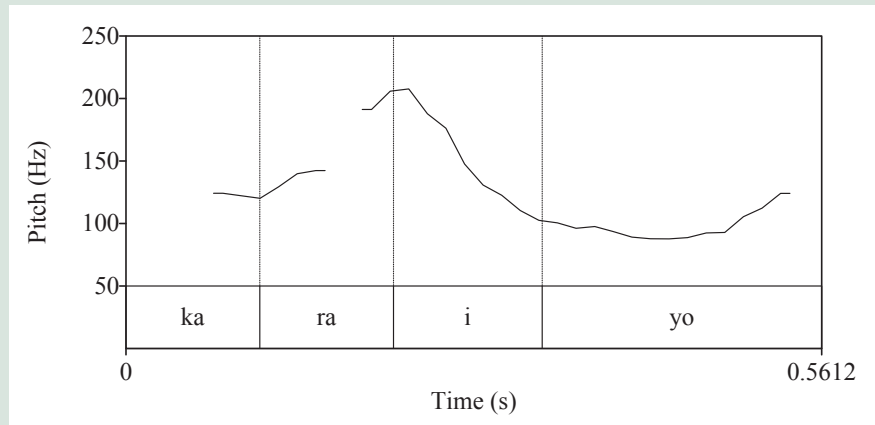


図1 「幸いよ」(上昇イントネーション)

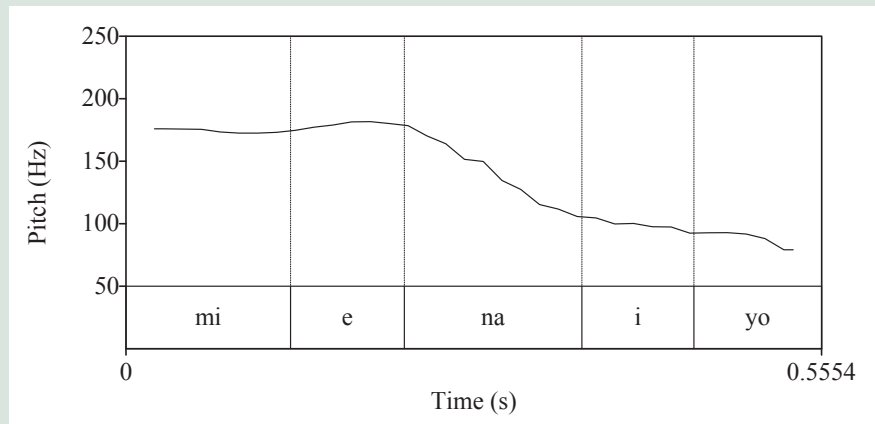


図2 「見えないよ」(下降イントネーション)

東山動植物園との連携協力について

研究協力部社会連携課

名古屋大学では、本学が持つ教育研究上の特色を名古屋市が進めるまちづくりの中にかに生かすことができるか、その可能性を探るため、平成23年10月に本学役員が名古屋市庁舎を訪問し、名古屋市総務局幹部と意見交換会を行いました。席上名古屋市側からは「学生タウンなごや」モデル事業への協力依頼や久屋大通の魅力向上のためのワークショップの紹介等が、また本学からは東山動植物園との連携について提案があり、意見交換の後、今後も定期的に会合を実施していくことを確認しました。

これを契機として、本学と名古屋市との連携協力の実質化についての検討が本格化し、当面は東山動植物園について特に園側の要望の強い植物園を対象とした連携を検討することとなりました。本学においては、東山植物園との連携の具体的な項目を設定するため、11月に大学院生命農学研究科及び博物館等へ参加の働きかけを行った結果、複数の教員から具体的な連携課題の提案があり、実質的な検討を開始しました。

こうした学内での検討を踏まえて、本年2月に

は東山植物園との意見交換会を開催し、資料1のように10項目以上の具体的な事項について個別に担当する窓口を定め、実現に向けて検討することとなりました。今後は、東山植物園との連携協力に関する協定の締結も視野にこれらの事項の具体化に向けた取り組みを進めていくこととしています。

なお、東山植物園との連携に関する提案等については、研究協力部社会連携課（052-747-6584）で随時受付けています。



名古屋大学（手前）及び東山動植物園（奥）

名古屋大学と東山植物園との連携事項（資料1）

事項	具体的事項	対応窓口	総合窓口
調査研究	東海地方における絶滅危惧植物の遺伝的特性の解析と種保存への取り組みと東海丘陵要素植物の保全生物学的調査	戸丸教授（生命農学研究科）(789-4048) tomaru@agr.nagoya-u.ac.jp	研究協力部社会連携課 (担当：片岡) (747-6584) kataoka.kenji@post.jimu.nagoya-u.ac.jp
	森林の構造、種組成、動態に関する野外調査	中川准教授（生命農学研究科）(789-4047) miko@agr.nagoya-u.ac.jp	
	植物園が保有する貴重種・希少種における育成技術の研究		
普及啓発	東山丘陵より排出される未利用木質バイオマス利活用	福島教授（生命農学研究科）(789-4159) kazu@agr.nagoya-u.ac.jp	
	博物館教員によるミニ講演付きガイドツアー	西田准教授（博物館）(789-5764) nishida@num.nagoya-u.ac.jp	
	東山丘陵地帯の自然に関する展示	西田准教授（博物館）(789-5764) nishida@num.nagoya-u.ac.jp	
	東山植物園を利用した名大博物館実習	西田准教授（博物館）(789-5764) nishida@num.nagoya-u.ac.jp	
環境・防災対策	伊藤圭介研究	西田准教授（博物館）(789-5764) nishida@num.nagoya-u.ac.jp 岡部課長（附属図書館情報サービス課）(789-3674) okabe.kousuke@post.jimu.nagoya-u.ac.jp	
	急増するカラス対策		
その他	帰宅困難者を出さないための防災対策		
	連携する大学の学生が無料で入園できる制度		

平成23年度名古屋大学総長顕彰

8名1団体表彰



平成23年度名古屋大学総長顕彰授与式が、3月26日(月)午後4時より、豊田講堂第1会議室において行われ、8名の学生と1団体が表彰されました。

総長顕彰制度は、学問の研鑽や文化・社会活動等を通じて、「名古屋大学学術憲章」の目指す人物像を実践している学生を称えるために平成15年度に創設されたものです。顕彰の対象は、「学修への取り組み」(学修において成果が伴う取り組みを積極的に行っており、その姿勢・成果が他者の模範となると認められる者)及び「正課外活動への取り組み」(社会貢献活動、ボランティア活動、課外活動等において優れた評価を受けた者、又は本学の名誉を著しく高めた者)の2部門からなります。

今年度は、「学修への取り組み」部門に7件の学部推薦があり、また、「正課外活動への取り組み」部門には自薦・他薦を合わせて18件の応募がありました。

これら合計25件の推薦・応募について、理事、部局長等で構成する総長顕彰委員会における審査の結果、「学修への取り組み」部門で5名、「正課外活動への取り組み」部門で3名・1団体が受賞

しました。

授与式終了後に行われた総長と受賞学生との懇談会においては、終始なごやかな雰囲気の中、総長から学生に対する将来への激励があり、また、関係教職員と受賞学生による活発な意見交換が行われました。

全体の講評

今年度で9回目を迎える総長顕彰制度への推薦・応募のあった学生達の取り組みは、意欲や姿勢、各活動への熱意や情熱が強く感じられ、とても素晴らしいものばかりでした。惜しくも受賞を逃した学生も甲乙付けがたい内容であり、今後の活躍が楽しみです。

受賞した学生・団体においては、名古屋大学の目指す「勇氣ある知識人」としての更なる研鑽を積み、今後の学生生活や社会生活において、後に続く本学の他の学生の目標となりうる人材としてのさらなる成長を期待します。

「学修への取り組み」部門

氏名	学部学科・学年	受賞理由
ふたむら いくみ 二村 郁美	教育学部人間発達科学科 4年	附属学校在学中から「思いやりの心を学校教育で育むこと」を研究し、疑問点を放置せずに積極的に解消していく学修姿勢は、1年入学時から4年前期までの全ての履修科目が「優」という結果に表れている。卒業論文のテーマ「災害ボランティアにおける活動動機の種類と活動参加意思の関連ーボランティア活動に伴うコストに着目してー」もコストを意識したボランティア活動という点がユニークで独創的である。周囲からの信望も厚く多くの友人を持ち人格的にも優れた学生であり、本学学生の良い模範となることを期待すると共に、さらに研究を進めていくことを期待する。
ながもり ゆうき 永盛 友樹	理学部生命理学科4年	学業と陸上部の両立、さらにマンチェスター大学に留学しての研究活動と、高いモチベーションを持って学生生活を送っている。「好きで興味があれば学業とスポーツの両立は困難ではない」との信念のもとに努力する姿勢は本学学生の模範である。今後は「神経細胞に関する研究」に努力すると共に、研究室・学部・大学間の垣根を越えた交流を積極的に進め、リーダーシップを発揮し、将来、国際的に活躍することを期待する。
やまぐち りょう 山口 遼	医学部医学科6年	後輩学生の指導や教員FDワークショップでは、学生の代表者として積極的に協力し高い評価を得ている。下級生の指導や東日本大震災のボランティア活動を通じて学んだ探求心とリーダーシップの重要性を今後の研究活動にも生かし、高い理念のもと邁進することを期待する。
さかい としみつ 坂井 利光	工学部電気電子・情報 工学科4年	積極的な学習姿勢や講義では扱わないプログラミング言語などへの自主的な取り組み、同級生へのわかりやすい説明など、他の学生の模範となる活動を行っている。「コンピューターは万能ではなくバグ（不具合や誤り）をなくしたい」という目標の達成と、更に高度な専門知識を擁する研究者・技術者となることを期待する。
たなか なつみ 田中 奈月	農学部応用生命科学科 4年	納得するまで深く考え調査していく姿勢は積極的で、他大学まで出かけて実験する姿勢は研究に対するどん欲さを感じる。他の学生・大学院生をしのぐ実験量と時間忘れて実験に取り組む姿勢は実験科学の重要な部分であり、研究者としても将来が楽しみである。

「正課外活動への取り組み」部門

氏名・団体名	代表者	分野	受賞理由
しみず かずき 清水 一紀 (医学部2年)		正課外研究活動	「人の命を救うことに国境はない。」という志のもと、国際的事象に強い関心を持ち、個人的に研究していることは高く評価できる。第27回佐藤栄作賞の最優秀賞を史上最年少で受賞したことにより、本学の名誉を高めたことも評価できる。将来、国際社会で活躍することを期待する。
さとう ゆりあ 佐藤友利亜 (教育学部4年)		正課外研究活動	東日本大震災の学生ボランティアとして、街頭募金活動や「陸前高田市の子ども達を名古屋へ招待するプロジェクト」の実行委員会委員としての活動は、社会への貢献として高く評価できる。大学生活で得た使命感を今後も発揮して活動することを期待する。
あいる air	たなべ みつひろ 田辺 光弘 (理学部4年)	社会貢献活動 本学への貢献活動	本学に在学する障害学生（重度聴覚障害学生）の授業や実験・セミナー等に同席して、全ての会話を目の前にあるディスプレイに表示するというサポート活動を行っていることは、当該学生のみならず担当教員や周りの学生にとっても大変に重要である。このような活動は全国的にも珍しく、今後、大学構内のバリアフリー化に協力すると共に、一般学生への意識向上にも注力し、さらに発展することを期待する。
たてべ じゅんぺい 建部 順平 (工学部3年)		正課外活動 (スポーツ)	出身地にあるスキー団体に所属してモーグルスキーの競技活動を行い、平成22年度からは、フリースタイルナショナルチームメンバーの一員としてワールドカップやオリンピック等の出場を目指し、また、海外遠征等に必要な資金についてはアルバイトで捻出の上参加する等、学業と両立しながら挑戦を続けるその姿勢は文武両道と呼ぶに相応しく、他の学生の模範となる。今後さらに精進して2年後のソチオリンピックの出場を期待する。

平成23年度名古屋大学総長顕彰 受賞者及び受賞団体のことば

「学修への取り組み」部門

思いやりを育むために

二村 郁美 教育学部人間発達科学科4年



思いやりを多様な側面から探究中

私は中学校のころに「思いやりのところを育むにはどうすればよいのか」ということに興味を持ち、「すべての人に思いやりを持ってもらうために、学校教育の中で思いやりを育む方法を追求したい」という思いから、教育学と心理学の両方を学ぶことができる名古屋大学の教育学部に入学しました。そのため、この4年間は心理学と教育学両方の多様な領域を幅広く学ぶよう心がけてきました。また、初めは思いやりと関係がないと思っていた教養の授業や教職課程での学び、吹奏楽サークルでの経験なども、実際には深く思いやりと結びついており、自分のテーマを追求する上で、そして私自身が成長する上で非常に貴重な経験となりました。

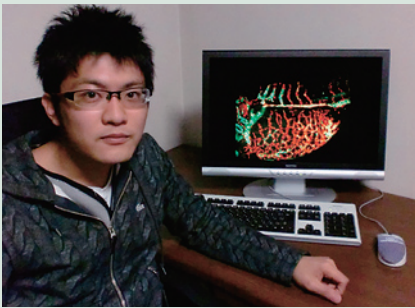
来年度からは大学院に進学します。これからも学部4年間で培った知識と経験をもとに、さらに思いやりを育む方法について多様な側面から探究し続けていきたいと思っています。

ふたむら いくみ 1989年生まれ 千葉県出身

「学修への取り組み」部門

大学での学習と留学を通して

永盛 友樹 理学部生命理学科4年



可視化したアフリカツメガエルの血管とともに

私は、将来、国際的に競い合って活躍したいと考えており、大学では、興味を持つ分野である生物学と、国際社会で活動する為に必要な、英語を特に重点的に学習してきました。

大学で学習を重ねる内に、今まで自分の身に付けた事が、国際的にも通用するか試したい、と強く思うようになり、学部間交換留学制度を利用し、4年時の卒業研究を英国のマンチェスター大学にて行いました。卒業研究では、アクチビンと呼ばれるタンパク質の、血管形成における役割を同定することを目的とし、研究を行いました。この卒業研究を通して、大学生活を通して身に付けた、生物学の知識や英語力が、実際に海外でも通用すると実感することができたことは、今後の学習、研究活動への大きな励みとなったと思います。

今後は、大学生活や留学で学んだことを活かし、名古屋大学大学院にて、社会的、医療的に重要なテーマである神経軸索再生に関わる研究を行う予定です。

ながもり ゆうき 1990年生まれ 愛知県出身

「学修への取り組み」部門

名古屋大学で得たこと・抱負

山口 遼 医学部医学科6年



後輩たちに説明しているところ

6年間の学生生活を通して多くの先生方や先輩方にお世話になり、上から受け取った恩を後輩たちへの指導という形で返そうと努力しました。その過程で教育にかかる準備の大変さと、その苦労を超える喜びを経験しました。またロビンス基礎病理学という教科書の翻訳作業に従事したことで、世界中の人々に自分の知識を伝えて医学の発展に貢献していく可能性を知り、将来は自分の言葉で教科書を執筆しようという目標ができました。

東日本大震災の際には瓦礫処理に従事しましたが、素人ができる作業には限界がありもどかしく感じたことから、医師として努力を重ねて高い専門性を身につけ、災害時に最大限の貢献をしようと強く決意しました。

今後は、最も興味を持った心奇形分野の一人前の術者となるために、症例の多い海外で修業して教育にも携わりながら心臓血管外科医として成長して、その後は強力な治療手段である心移植を日本に今以上に普及させていきたいです。

やまぐち りょう 1986年生まれ 東京都出身

「学修への取り組み」部門

思いを実現するために

坂井 利光 工学部電気電子・情報工学科4年



アイデアが詰まった研究ノート

私は、この情報社会の中で自分に何かできることはないかということを考えていたため、電気電子・情報工学科の情報コースへ進学しました。大学の4年間では専門分野のみならず、幅広い知識と考え方を身につけたいと思い勉学に取り組みました。

情報コースで多くの授業を受講し学んでいるうちに、「バグのないソフトウェア」、すなわち間違いを引き起こさないソフトウェアを実現するための理論的な研究を行いたいと思い、4年次にはそのような研究に取り組みました。悩んだり躓いたりすることもありましたが、理論的な成果を得ることができました。

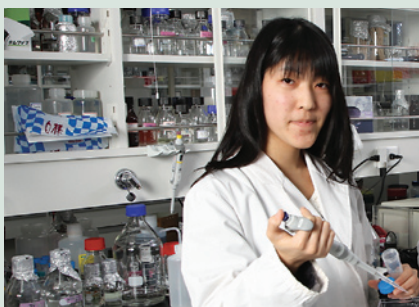
来年度からは大学院情報科学研究科へ進みます。これからは、さらに理論的な研究を進めつつ実験も行っていき、少しでも「バグのないソフトウェア」に関する理論的な土台を作っていきたいと思っています。

さかい としみつ 1990年生まれ 愛知県出身

「学修への取り組み」部門

4年間を振り返って

田中 奈月 農学部応用生命科学科4年



実験風景

私は、現在細胞ダイナミクス研究室に所属しており、モデル植物であるシロイヌナズナを用いて、根毛の存在意義を明らかにする為の研究と、細胞内オルガネラである液胞に過剰亜鉛を隔離する亜鉛輸送体の輸送調節機構を解明する研究をしています。

この一年間を振り返ってみると、実験により全く未知のことを発見できる喜びを味わうことができたと共に、3年生までの講義や実験実習で得た細部にわたる基礎知識がいかに大切かということも実感しています。講義や実習で理解できなかったことや疑問に感じたことは、納得できるまで文献で調べたり、先生方に質問し、その都度解決してきて良かったと感じています。このような恵まれた環境で学んでこられて感謝の念でいっぱいです。

これからは、大学院後期課程まで進学し、卒業研究の内容をさらに深く探求し、より多くの知識を修得し、いつか研究の成果が社会に貢献できるよう努力を続けていきたいと思っています。

たなか なつき 1990年生まれ 三重県出身

「正課外活動への取り組み」部門／正課外研究活動

「知的に遊ぶ」魅力に惹かれて

清水 一紀 医学部医学科2年



第27回「佐藤栄作賞」受賞式におけるスピーチの様子

名古屋に来てからまもなく3年目を迎えます。修学年数が6年間の医学部医学科に進学した私は、入学以来、大学における学びに加え、いかにして「知的に遊ぶ」かについて考えて参りました。

その中で、国際NGOの活動に興味を持った私は、『DIY世界の誕生に見る地球市民社会の構築—NGOの不可欠性の証明—』という表題で論文を執筆し、第27回「佐藤栄作賞」において、史上最年少で最優秀賞を受賞致しました。

私は、NGO等に関連する分野の専門家ではありません。その私が、論文内容を評価していただいたことは、専門家でない人間も、その取り組み次第では専門家に太刀打ちできる知識・能力を携えることが可能であると示したと言えます。

今後も、ジェネラリストとしての能力、スペシャリストとしての能力、この両方を兼ね備えた人間を目指し、あらゆる事柄にアンテナを張り、考えることを通し、さらに「知的に遊ぶ」ことに精進して参る所存です。

しみず かずき 1991年生まれ 奈良県出身

「正課外活動への取り組み」部門／正課外研究活動

東北の復興に向けて

佐藤 友利亜 教育学部人間発達科学科4年



陸前高田の中学生が名古屋に到着する際のお出迎えの様子

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、多くの命と東北の美しい街並みを奪いました。

私は、TJG311（東北地方太平洋沖地震復興支援学生団体）の代表として名古屋市栄を拠点とした街頭募金活動を行い、12,041,610円を日本赤十字社へ、424,206円を「NPO みんつな」という岩手県陸前高田市に集中して復興支援活動を行う団体へ寄付しました。その後も名古屋市主催「陸前高田市の子どもたちを名古屋市に招待するプロジェクト」の実行委員会に参加し、学習旅行に行けなくなってしまった岩手県陸前高田市の中学生226名を名古屋に招待しました。私たち学生の活動内容は、写真撮影をしたり交流会で一緒に遊んだりすることでした。

地震と津波の恐怖や、家族を亡くした悲しみは子ども達の心から消えません。それでも明るく振る舞う子ども達から私はたくさんの勇気をもらいました。今後もより多くの学生を巻き込みながら、子ども達との交流を続け、東北の復興支援を続けていきます。

さとう ゆりあ 1989年生まれ 愛知県出身

「正課外活動への取り組み」部門／社会貢献活動・本学への貢献活動

共に学べるキャンパスを目指して

あいる
air

田辺 光弘 理学部物理学科4年



ノートテイクによるサポート（修学支援）活動の様子

あいる air は、学生相談総合センター障害学生支援室に登録してサポートスキルを習得し、障害学生のサポート活動をする SGS サポーターの集まりです。支援室から依頼のあるサポート（修学支援）活動や支援室主催の講座での手伝い、その他に自分たちのサポート技術をスキルアップさせるための練習会を行なっています。air の理想は、障害のあるなしではなく、どの学生もその能力に応じて十分に学べる豊かな学生生活を、実現できるようにしていくことです。

今後は様々なスキルを習得するため、車椅子介助や障害についての理解を深める学びができるように、支援室に相談しています。また air である SGS サポーターを増やしていく必要もあり、名大祭などでのピラ配布や Web サイトの開設などを考えています。障害学生支援の活動に興味を持っている方、連絡をお待ちしています。

たなべ みつひろ 1989年生まれ 愛知県出身

「正課外活動への取り組み」部門／正課外活動（スポーツ）

ソチオリンピックに向けて

建部 順平 工学部機械・航空工学科3年



North American Cup での予選の第2エア

私は上村愛子選手で有名なモーグルという競技に取り組んでいます。モーグルに関する費用はアルバイトで稼ぎ、勉強とモーグルの両立を目標に励んでいます。

今シーズンは初めて海外試合に出場しました。2月に行われたモーグル強豪国のカナダ・アメリカ・オーストラリアが出場する North American Cup では決勝に進出することができ、実力がついてきていることを実感できました。

来シーズンはソチオリンピックの選考が始まります。オフシーズンの中にモーグルの中で行われるジャンプ（エア）にさらに磨きをかけ、フィジカルの強化を図り、来シーズン行われるソチオリンピックの選考となる試合では自分の実力を発揮し、オリンピック日本代表に選ばれるよう1日1日を大事にしていきたいと思っています。

たてべ じゅんぺい 1991年生まれ 福井県出身

文学研究科公開シンポジウム「ことばの形と意味」を開催

●大学院文学研究科

大学院文学研究科は、3月3日(土)、文学研究科127講義室において、文学研究科公開シンポジウム「ことばの形と意味」を開催しました。これは、人文学における最新の研究成果を社会に公開するため毎年3月に開催しているもので、今回で12回目となります。

最初に、羽賀文学研究科長があいさつを行い、大室剛志



シンポジウムの様子

同研究科教授から趣旨説明がありました。続いて、司会の横越 稔名古屋工業大学准教授がシンポジウム講師を紹介し、各講師から研究報告が行われました。

まず、田中智之同研究科准教授が「ことばの形を探る：併合と構成素構造」と題し、ことばの形をつかさどる最も重要な操作として併合があり、併合により構成素と構成素が組み合わされ、この操作の繰り返しにより、文の構成素構造が決定されると語りました。次に、中川直志中京大学准教授が「移動：その動機とメカニズム」と題し、移動操作の心的実在性の証拠、英語の wh 移動と日本語のかきまぜとの共通点について語りました。さらに、二村慎一愛知淑徳大学准教授が「語形成における諸問題：名詞表現に注目して」と題し、英語と日本語の語形成に関する両言語の共通点と相違点について具体例に基づき論じました。最後に、大室教授が、「意味から形を見る：優先性規則体系」と題し、英語の単語の意味が優先条件で規定されることを見て、英語の形でも同じことが言えると示唆しました。

日本語と英語からことばの奥底に潜む形と意味の規則性を探る、意義深いシンポジウムとなりました。

西洋中世・近世フランス古文書学ワークショップを開催

●グローバル COE プログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」

グローバル COE プログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」は、2月20(月)から22日(水)の3日間、文学研究科大会議室において、西洋中世・近世フランス古文書学ワークショップを開催しました。フランスからジャン＝ルー・ルメートル ソルボンヌ高等研究院名誉教授と、その夫人であるニコル・ルメートル パリ第一大学教授を招



講義の様子

き、講義と実習指導を行いました。

ジャン＝ルー名誉教授は西洋中世の宗教史の専門家で、特にネクロロギウムと呼ばれる過去帳系統史料の世界的な権威です。若くして、フランス学士院の要請で全国各地の教会、修道院、文書館に散在する中世過去帳の写本の全数調査をして目録を作り上げ、数万点に及ぶ調査を37歳で完成させた大型判2巻本の出版は、学界を驚嘆させました。

ニコル教授は近世史の専門家で、特に、17世紀の南フランスの農村社会を、細密なミクロストリアの手法で明らかにした『書記と占師』は、忘れられたあるいは未刊の農民の記録を発掘してこれを縦横に駆使した傑作です。

3日間にわたり、午後の前半にジャン＝ルー名誉教授がそれぞれ「ローマ大文字体からカロリング小文字体へ」、「カロリング小文字体から人文主義者書体へ」、「証書記録論」と題して、また午後の後半にニコル教授が「印刷バトルド体から個人流の草書体へ (1)(2)(3)」と題して、講義と実習指導を行いました。参加者は、ラテン語文書や17世紀の手書き本の写真版を、指名されて解読することを求められ、大学院生だけでなく、教員もまた、ひと昔前の留学の折の苦労を追体験するという極めて意義深い3日間でした。

2011年度がんを生き抜くライフトピアスクール修了式を挙

●医学部

医学部保健学科は、3月4日(日)、大幸地区にある東館において、2011年度がんを生き抜くライフトピアスクールの修了式を挙

同スクールは、平成18年に行われたパブリックコメント交換会で、地域住民ニーズのトップに、“がんに関する知識の普及と人材育成”が挙げられたことから開始されたも



ライフトピアサロンの質疑応答風景

ので、「がんを体験し、支え、支えられてきた人々から学び、交流しながら生きる力を伸ばしましょう」を合言葉に、がん体験者自身がスライドを作って「がんを克服して生きる秘訣」を紹介したり、医師や看護師、市民団体が講義を行うなどの活動をしています。スクール開始当時本学総長だった平野前総長が提唱した「豊かで美しい持続可能な社会(エコトピア)の実現」という理念にちなんで「がんを生き抜くライフトピアスクール」と命名し、がんを禁句とせず、「最新のがん治療」「がんと放射線」など積極的に学び、ピアサポートにも取り組んできました。さらに受講者のニーズを取り入れ、キャンパス型緩和ケアサロンを開設し、毎週水曜日には、がん体験者の憩いの場として“ライフトピアサロン”をオープンしています。

修了式では、今年度受講者65名が、スクールの校長を務める濱嶋医学系研究科健康社会医学専攻長より修了証書を授与され、1年間の成果を分かち合いました。

同スクールは平成19年に開始されてから5期目を迎え、通算修了者は628名にのぼっています。

第4回若手シンポジウムを開催

●グローバルCOEプログラム「マイクロ・ナノメカトロニクス教育研究拠点」

グローバルCOEプログラム「マイクロ・ナノメカトロニクス教育研究拠点」は、3月1日(木)、ES総合館において、第4回若手シンポジウムを開催しました。同シンポジウムは、本学のグローバルCOEプログラムの若手研究者に成果発表の場を提供するとともに、学問分野の壁を越えた研究者間の意見交換を促進するために、毎年行ってい



シンポジウムの様子

るものです。

まず、福田敏男工学研究科教授が開会のあいさつを行い、続いて、中川誠人京都大学iPS細胞研究所講師から、「iPSC Research for Regenerative Medicine – From Basic Research to Application –」と題して特別講演がありました。現在広く新聞やメディアで話題になっているiPS細胞の研究所の研究者の発表であることもあり、注目を集めました。

その後、若手研究者による研究発表が行われました。研究分野ごとに再生医療、バイオマニピュレーション、オンチップロボティクス、精密工学とマイクロナノマテリアル、医療用ロボット、ドラッグデリバリーシステムの6つのセッションに分けられ、合計で20件の発表が行われました。いずれのセッションでも、若手の研究者同士が熱心に議論をする様子が多く見られました。最後は、大日方五郎エコトピア科学研究所教授が開会のあいさつをしました。

全日程を通して約80名の来場者があり、盛況のうちに終了しました。同シンポジウムを通じて、本学のグローバルCOEのさらなる発展と若手研究者の研究内容の向上が期待されます。

国際シンポジウム「アジアにおける臨床環境学研究的展開」を開催

●グローバル COE プログラム「地球学から基礎・臨床環境学への展開」

グローバル COE プログラム「地球学から基礎・臨床環境学への展開」は、2月27日(月)、28日(火)の両日、環境総合館において、国際シンポジウム「アジアにおける臨床環境学研究的展開」を開催しました。同プログラムでは、研究を地域に還元する手法や、住民、行政との協働も重要であると考え、プログラム開始当初から、オンサイト・リサーチ・トレーニング(ORT)という教育システムを設計し、教員と博士課程の学生が一定期間現地に赴く体制を作ってきました。同シンポジウムは、その成果と、それに

連動する臨床環境学の研究活動の紹介を中心に構成しました。

27日(月)の午前は、安成哲三地球水循環研究センター教授がイントロダクションを、鈴木基之東京大学名誉教授が基調講演を行い、午後からは、劉 昌明中国科学院地理科学与資源研究所院士、宋 献方同研究所教授が「中国における都市化に伴う社会・エコシステムの変化-診断から治療へ」と題するセッションを行いました。

28日(火)の午前は、インドネシアのアバカール・モハメッド・ラハジ ムラワルマン大学教授が「東南アジアにおけるバイオリソースのエコ・フレンドリーな利用の未来」と題するセッションを行い、午後からは、「伊勢湾流域圏における活動レポート」と題し、伊勢湾流域圏の臨床環境学研究とORT報告を行いました。最後に、ドイツのユルゲン・アーリング カッセル大学教授、ステファニー・レスラー エコロジカルな都市と地域の発展のためのライプニッツ研究所研究員による「統合的な空間計画の可能性」と題する特別セッションを行いました。

同時通訳を実施したこともあり、参加者は約100名にのぼりました。



記念撮影

大学教育改革フォーラム in 東海2012を開催

●高等教育研究センター

高等教育研究センターは、3月3日(土)、ES総合館等において、大学教育改革フォーラム in 東海2012を開催しました。開催7回目となった今年は、企画セッション7件、ポスター発表40件で、237名が参加しました。

開会あいさつにおいて、山本理事は「実践の智慧」の重要性を述べ、組織を越えて智慧を交換共有し、実践と理念

を橋渡しするために同フォーラムを活用してほしいと呼びかけました。続く基調講演「震災後の日本社会と大学教育」では、講演者の野家啓一東北大学理事が、「『学問の知』と『生活世界』を媒介し、リスク評価とリスクの分配を的確に判断できるような専門的職業人の育成が今大学に求められている」と指摘しました。

企画セッション、ポスター発表のテーマは例年にも増して多岐に渡りましたが、昨年の震災を受けて、大学のあり方や危機管理の課題を取り上げたものが増えたようでした。また、学生の主体的な学びを支援する環境や仕組み作り、教養教育の再考、教職員の自発的な能力開発の取り組みなども数多く取り上げられ、活発に議論されました。パネルディスカッションでは、体験学習をテーマに据え、研究体験、就業体験、ボランティア体験を通じた学習を提供しているパネリストとともに、「学生に質の高い体験をどのように与えるか」が討論されました。

参加者の間には様々な交流が生まれ、同フォーラムを大学教育の更なる発展への契機とすることを互いに確認しあって、盛会のうちに終了しました。



パネルディスカッションの様子

ICCAE 2011年度第10回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センター（ICCAE）は、3月9日（金）、農学部第7講義室において、2011年度第10回オープンセミナーを開催しました。今回は、科学研究費助成事業に採択されている国際共同研究のワークショップに参加するため来学した、ダルマス・シグンガ ケニア・マセノ大学准教授とオモンディ・アハオ同大学講師を講演者に迎えました。



シグンガ准教授による講演の様子

シグンガ准教授は、ケニア全体の土地の約33%（1700万ヘクタール）が降雨のある作物生産可能地であるのに、排水等の問題でその40%未満（680万ヘクタール）しか利用されておらず、また降雨に恵まれていない約67%（3400万ヘクタール）のうち約20%（700万ヘクタール）が、灌漑ポテンシャルを有していることを報告しました。ケニアでは土地がないのではなく、灌漑や排水コントロールなど水管理ができないために活用されていない土地が多く、また土壌の劣化や侵食が広がり問題となっているため、適切な水・土壌管理が必要であることを強調しました。

一方、アハオ講師は、サブサハラアフリカにおける女性の貧困は、教育の不平等、雇用や仕事の責任の不平等など様々な原因で起こっており、その始まりは、植民地化による分割統治や種族間の扱いの違いなどであると話しました。また現代では、地方と都会の二極分化や、都会の中においても経済的待遇の違いが存在することなどが、女性の貧困に強く影響していることを指摘しました。

学内外から約20名の参加者があり、ケニアの土壌の実態とその肥沃度管理の必要性や、ジェンダーの問題について、共有することができました。

合同セミナー・シンポジウム&ラボツアーを開催

●グリーンモビリティ連携研究センター

グリーンモビリティ連携研究センターは、3月12日（月）、IB電子情報館において、合同セミナー・シンポジウム&ラボツアーを同時開催しました。これは、車両の超軽量化技術の現状と未来を一望することを目的とし、経済産業省中部経済産業局の次世代自動車地域産学官フォーラム事業と連携して、社団法人中部産業連盟が主催する次世



シンポジウムの様子

代自動車技術開発セミナーと、同センターが主催する第2回次世代自動車公開シンポジウムとを同時開催したもので、東海地域の企業、公益法人、大学関係者など約250名が参加しました。

午前中の第1部「現状からみた展望」では、「車両超軽量化技術の事例と展望」をテーマとして同セミナーが行われ、午後の第2部「未来」では「超軽量化技術の深化をめざして」をテーマとして同シンポジウムが行われました。シンポジウムは、齋藤永宏同センター教授のあいさつに始まり、是津信行同センター准教授による司会のもと、影山裕史トヨタ自動車株式会社有機材料技術部主幹が基調講演を行い、続いて、吉武明英 JFE スチール株式会社スチール研究所研究技監、熊谷正樹住友軽金属工業株式会社研究開発センター部長、千野靖正独立行政法人産業技術総合研究所サステナブルマテリアル研究部門グループ長が、それぞれ最新の研究について講演しました。最後に、石川孝司工学研究科教授があいさつを行い、閉会しました。

昼食休憩の時間にはラボツアー及びキャンパスツアーが行われ、参加者は最新の研究施設やノーベル賞展示室などを熱心に見学しました。また閉会後には交流会が行われ、参加者と講演者の懇親が深められました。

2008ノーベル賞展示室来場者1万人突破の記念式典を挙げる

●大学院理学研究科、素粒子宇宙起源研究機構、博物館



色紙を手にする西垣助教(左)と益川特別教授(右)

大学院理学研究科、素粒子宇宙起源研究機構及び博物館は、3月14日(水)、ES総合館2008ノーベル賞展示室において、2008ノーベル賞展示室来場者1万人突破の記念式典を挙りました。

同展示室は、2008年に益川敏英特別教授と小林 誠特別教授がノーベル物理学賞を、下村 脩特別教授がノーベル化学賞を受賞したことを記念し開室したもので、ノーベル賞メダルの公式レプリカや研究概要を展示しています。昨年6月、ES総合館が竣工されたのに伴い同館2階においてリニューアルオープンし、オープン後約8か月の今年2月で来場者が1万人を突破しました。

式典には来場1万人目となった西垣景太中部大学生命健康科学研究所助教を招き、國枝理学研究科長のあいさつの後、吉田博物館長より来館者1万人目の証明書が、益川特別教授より色紙が贈呈されました。同展示室展示委員の教員及び理学部、博物館の事務職員らが参加しました。

外部評価委員会を開催

●大学院経済学研究科



委員会の様子

大学院経済学研究科は、3月5日(月)、同研究科附属国際経済政策研究センターの外部評価委員会を開催しました。

評価委員であるグエン・ティ・ビック・ハー ハノイ貿易大学教授、浅野潤一日本経済新聞社名古屋支社次長、齋藤文学研究科附属日本近現代文化研究センター長、行森康裕日本政策投資銀行東海支店次長、社団法人キタン会理事である横井 太アルフレッサホールディングス最高顧問の5名に予め資料が送付されており、当日は、委員に対して同センターから補足説明をした後、質疑が行われました。

国際シンポジウムなど、同センターとして実施している諸々の事業に対する高い評価とともに、ホームページや広報活動の充実など、いくつかの要望も出されました。各委員から後日に評価書が提出され、それを基に報告書がまとめられます。

外部評価委員会を開催

●大学院情報科学研究科



委員会の様子

大学院情報科学研究科は、2月27日(月)、教養教育院会議室において、外部評価委員会を開催しました。今回の外部評価は、平成18年度から22年度までの5年間の教育・研究活動を自己評価した報告書をベースに実施したもので、平成18年度に実施した外部評価以来2度目になります。

事前に同研究科の自己評価報告書と報告書の要約を評価委員に送付し、当日は、研究科の概要、5年間での特筆すべき点、教育、研究指導、研究活動、学生支援、社会連携と広報を説明した後、委員から質問及びコメントがありました。続いて5専攻及び附属センターの活動を紹介し、その後、現地視察として3研究室の見学を行いました。最後に、研究科のアイデンティティの明確化、フレキシブルな教員構成の実現、学部教育と連携した一貫教育などについて、貴重な講評を受けました。

同研究科では、この外部評価の内容を外部評価報告書としてまとめる予定です。

第22回博物館企画展「奈良坂源一郎『蟲魚圖譜』-解剖学創始者のミュージアム」を開催

●博物館

博物館は、12月6日(火)から2月29日(水)までの間、第22回博物館企画展「奈良坂源一郎『蟲魚圖譜』-解剖学創始者のミュージアム」を開催しました。

奈良坂源一郎氏は、明治14年(1881年)に東京大学医学部を卒業すると同時に、本学の前身である愛知医学校長の後藤新平氏に招かれて一等教諭として在任し、解剖学などの教育により本学医学部の基礎を築いただけでなく、江戸時代の尾張本草学の流れを汲む博物学を通じた社会教育を行い、中でも、我が国で最初の私立博物館で現在の徳川美術館の淵源ともなる愛知教育博物館を創設したことにより、「名古屋文化史上不滅の人」と言われています。

同企画展では、本学創基140周年の機を受け、大学の源流をたどる視点を含めながら、博物館による奈良坂氏関連資料の整理と研究の成果を基にした展示が行われました。展示されたのは、奈良坂氏の解剖学と博物学の両面に關わる標本で、同氏による魚や昆虫などの緻密な博物画や動物標本、人体解剖図、人体組織標本プレパラートなどが含まれました。

また、企画展開催中の1月31日(火)には、元医学部附属



講演する高橋名誉教授(左)と加藤名誉教授(右)



展示場の様子

病院長である高橋 昭名誉教授が「医学とチョウ」、元教育学部教授である加藤詔士名誉教授が「奈良坂と愛知教育博物館」と題して、特別講演を行いました。

高橋名誉教授は、まず日本における西洋医学の歴史をひも解きながら医学と植物学の関連について触れた後、奈良坂氏の博物学的側面を詳しく紹介し、特にギフチョウの博物画の解剖学的正確さについて指摘しました。また、自身が医学とチョウの研究の両方を始めた経緯や、医学とチョウの研究の間に共通する「観察眼の重要性」について話し、解剖学と博物学の両面で第一級であった奈良坂氏を理解するにあたって示唆に富む内容でした。

加藤名誉教授は、奈良坂氏の博物学が個人研究にとどまらず、^{なごや}浪越博覧会の組織づくりや3度の教育博覧会の開催による社会教育活動を通して、明治25年に愛知教育博物館の設立に結実した経緯について、資料に基づき詳しく解説しました。これに関して、既に発表された学術論文の内容に加えて新たな資料もいくつか紹介され、名古屋文化史の中で長く忘れられていた愛知教育博物館の歴史に関する最新線の解釈が示されました。

100名近い聴講者は、奈良坂氏の知られざる業績が医学史や大学史、博物館史、さらに教育史の中に位置づけられ、その学術的意義が指摘されたことに大きな刺激を受け、講演の後にも活発な質疑応答や意見交換が続き、4時間に及ぶ盛況な会となりました。また、講演会には奈良坂源一郎氏関連資料の寄贈者である奈良坂 宏氏とその夫人の他、奈良坂源一郎氏の出身地である宮城県からもご子孫の方々が出席され、新たな資料や情報の提供を受ける機会ともなりました。

今後は、博物館が所蔵する未公開の奈良坂氏作博物画と本展示記録の出版を予定しており、また、戦時供出のためブロンズから石膏製になった奈良坂氏の胸像の保存に関して、検討課題としています。

ボタニカルアート作品展を開催

●博物館



東海林氏の作品

博物館は、12月6日(火)から2月29日(水)の間、博物館において、ボタニカルアート作品展を開催しました。同展示会は、第22回博物館企画展奈良坂源一郎「蟲魚圖譜」と同時開催されました。

ボタニカルアートとは植物細密画のことで、写真の発達した現代でも図鑑などにも用いられる博物画の一種です。展示品は、主に博物館友の会ボタニカルアートサークルの会員が平成23年に描いたもので、本学構内の植物を描いた作品も含まれていました。同サークルの会員は、初心者から、何年にもわたって描き続けている人など様々ですが、どの絵からも、植物をよく観察して描こうという気持ちが感じられました。

期間中には3,672名の来館者があり、中には何回も訪れたり、ルーペ持参で見学する方もおり、植物画愛好家の数が少なくないことを窺わせました。また、博物館友の会が製作したボタニカルアートカレンダーも好評でした。

第44回博物館コンサート「早春の音楽会」を開催

●博物館



コンサートの様子

博物館は、2月18日(土)に、同館展示室において、第44回博物館コンサート(NUMCo)「早春の音楽会」を開催しました。

同コンサートは、本物の標本に囲まれた環境で本物の音楽に触れてもらおうという催しで、今回は、愛知県を中心に活躍しているカルテットフリーセントが弦楽四重奏を行いました。

シューベルト作曲のアヴェ・マリアから始まり、ベートーベン作曲の弦楽四重奏曲第10番「ハーブ」より第一楽章などアンコールも含め全9曲が、およそ1時間にわたって演奏されました。展示室を埋めた約280名の聴衆は惜しめない拍手を送りました。

次回は、「知られざる音楽大国、ベネズエラのしらべ」を、5月26日(土)午後2時より開催します。

第4回地球教室「鉱物をさがそう!」を開催

●博物館



三田石材の採石場において鉱物を探す参加者

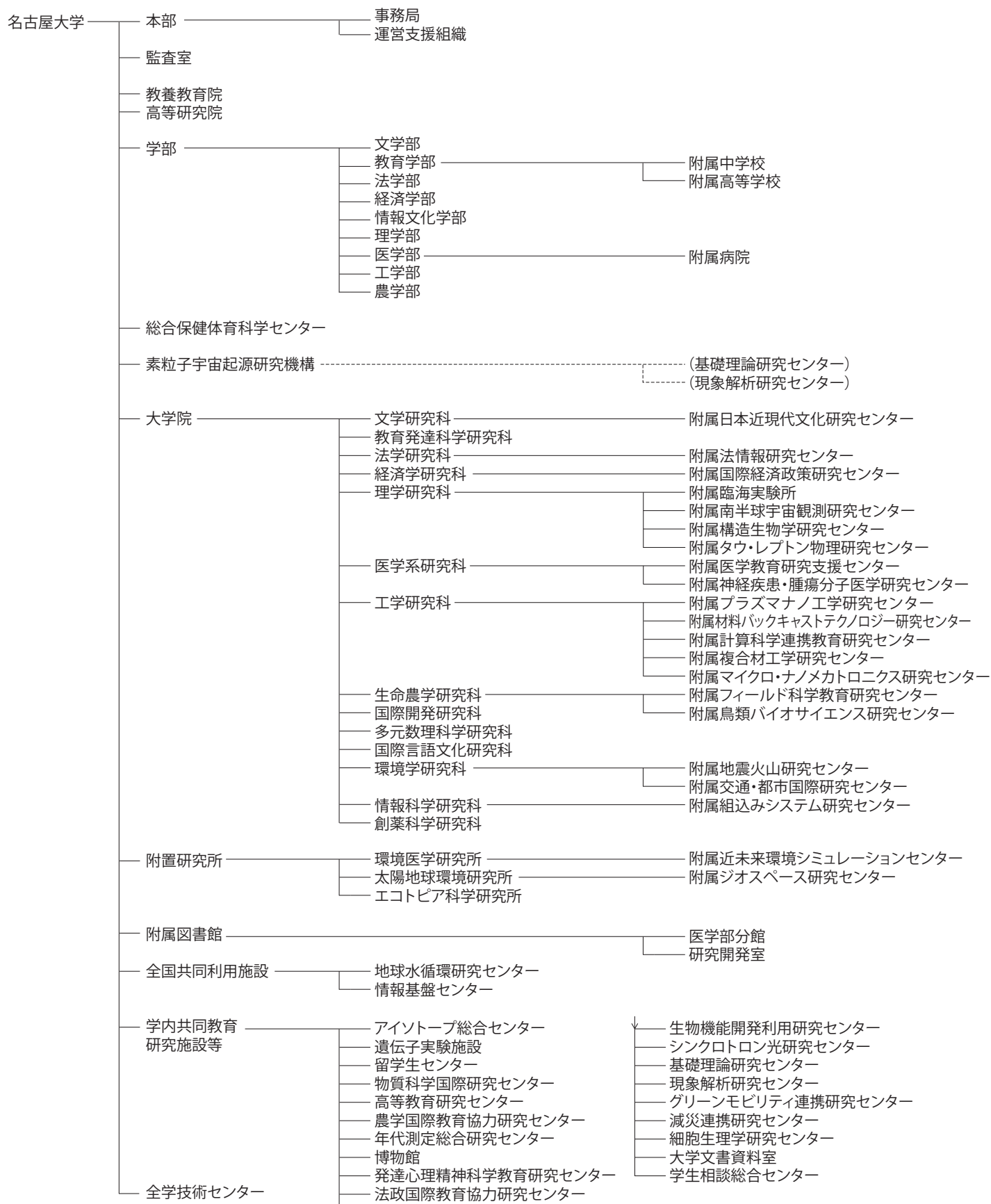
博物館は、2月25日(土)、26日(日)の両日、第4回地球教室「鉱物をさがそう!」を開催しました。今年度4回目となる今回は、約100名の応募者から抽選で選ばれた11組の親子が参加しました。

1日目は、共催している名古屋市科学館において、鉱物の観察を行いました。まず、「鉱物とは何か」、「どのように見分けるのか」について講義があった後、実際の鉱物標本を用いて結晶形や硬度、磁性などの属性を調べて特徴を把握し、最後に鉱物鑑定試験を行いました。

2日目は、西尾市東幡豆町にある三田石材の採石場において鉱物採集を行いました。参加者は、1日目の座学で養った鑑定眼を用いて鉱物を探し、続いて、蒲郡市にある生命の海科学館へ移動し、採集したザクロ石や電気石などの鉱物を用いてオブジェを作り、自らが発見した小さな自然美をさらに深く体験しました。

平成24年度名古屋大学組織図

平成24年 4月 1日



受賞者一覧

褒章関係

受章日	受章名	受章者の所属・職名	受章者	備考
H23.11. 3	秋の叙勲 瑞宝重光章	特別教授	杉浦 昌弘	

教員

受賞日	受賞名	受賞者の所属・職名	受賞者	備考
H23. 2. 4	井上科学振興財団 第27回井上研究奨励賞	物質科学国際研究センター助教	齊藤 尚平	市野良一（エコトピア科学研究所教授）と連名
H23. 3. 9	フラーレン・ナノチューブ学会 第7回飯島賞	物質科学国際研究センター助教	宮田 耕充	
H23. 5.27	新化学発展協会 平成23年度研究奨励賞	物質科学国際研究センター助教	齊藤 尚平	
H23. 7. 8	天然物化学談話会奨励賞	大学院理学研究科助教	山口潤一郎	
H23. 7.10	日本超音波医学会 第31回中部地方会 日本超音波医学会新人賞	医学部附属病院医員	明石真未子	廣岡芳樹（医学部附属病院准教授）、 伊藤彰浩（医学部附属病院講師）、 後藤秀実（大学院医学系研究科教授）、 他5名と連名
H23. 9. 4	日本教育社会学会 第4回奨励賞「著書の部」	大学院教育発達科学研究科准教授	内田 良	
H23. 9. 8	日本工学教育協会 「日本工学教育協会賞」業績賞	大学院工学研究科教授	石田 幸男	
H23. 9.14	第5回バイオ関連化学シンポジウム講演賞	大学院理学研究科助教	荘司 長三	
H23. 9.17	第18回日本排尿機能学会 河邊賞	大学院医学系研究科助教	松川 宜久	
H23. 9.18	錯体化学会賞	物質科学国際研究センター教授	渡辺 芳人	
H23. 9.20	2010年度日本天文学会研究奨励賞	大学院理学研究科准教授	鈴木 建	
H23. 9.21	日本遺伝学会 木原賞	遺伝子実験施設教授	石浦 正寛	
H23. 9.22	第7回野副記念奨励賞	大学院理学研究科教授	伊丹健一郎	
H23. 9.27	American Geophysical Union 2010 Editor's Citation for Excellence in Refereeing	太陽地球環境研究所教授	塩川 和夫	
H23. 9.30	科研費の審査委員表彰	物質科学国際研究センター准教授	吉久 徹	
H23.10. 8	第15回久保亮五記念賞	大学院多元数理科学研究科教授	永尾 太郎	
H23.11. 4	第13回日本感染症医薬品協会奨励賞	大学院医学系研究科助教	木村 幸司	
H23.11. 5	第1回日本植生史学会論文賞	年代測定総合研究センター教授	中村 俊夫	他3名と連名
H23.11.14	American Nuclear Society Reactor Physics Division Best Paper Award	大学院工学研究科教授	山本 章夫	遠藤知弘（大学院工学研究科助教）と連名
H23.11.15	日本化学会欧文誌 BCSJ 賞	大学院理学研究科助教	深澤 愛子	
H23.11.25	有機合成化学協会東海支部 第42回中部化学関係学協会支部連合秋季大会 特別討論会 VIP 賞	大学院工学研究科非常勤 研究員	泉関 督人	
H23.11.26	名古屋大学若手女性研究者サイエンスフォーラム 総長賞	大学院理学研究科特任助教	赤坂 茉莉	
H23.12. 6	日本燃焼学会 第49回燃焼シンポジウム ベストプレゼンテーション賞	大学院工学研究科教授	山下 博史	
H23.12. 6	日本燃焼学会 第49回燃焼シンポジウム 日本燃焼学会最優秀作品賞	大学院工学研究科教授	山下 博史	李 加寧（大学院工学研究科 M2）と連名
H23.12.12	IEEE Computer Society Japan Chapter Young Author Award	大学院工学研究科助教	塩谷 亮太	
H23.12.14	Asian Core Program Lectureship Award (China)	大学院理学研究科教授	伊丹健一郎	
H23.12.14	Asian Core Program Lectureship Award (Malaysia)	大学院理学研究科教授	伊丹健一郎	
H23.12.15	The 6th International Conference on Cutting- Edge Organic Chemistry in Asia, Asian Core Program Lectureship Award (Hong Kong)	大学院生命農学研究科教授	西川 俊夫	
H24. 1. 8	The 14th International Workshop of Advanced Plasma Processing and Diagnostics The 2th Workshop for NU-SKKU Joint Institute for Plasma-Nano Materials The Best Award	大学院工学研究科助教	竹田 圭吾	

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・職名	受賞者	備考
H24. 1.10	Analytical Sciences Hot Article Award	大学院工学研究科助教	安井 隆雄	社本英二（大学院工学研究科教授）、馬場嘉信（大学院工学研究科教授）、加地範匡（大学院工学研究科准教授）、他3名と連名
H24. 1.10	2nd Nano-interface Innovative Award	大学院工学研究科助教	竹田 圭吾	
H24. 1.18	環境大臣賞 地域環境保全功労者	大学院工学研究科教授	松田 仁樹	
H24. 1.20	第8回（平成23年度）日本学術振興会賞	大学院工学研究科教授	忍久保 洋	
H24. 1.20	平成23年情報処理学会高度交通システム研究会優秀論文賞	大学院情報科学研究科研究員	勝沼 聡	本田晋也（大学院情報科学研究科准教授）、佐藤健哉（大学院情報科学研究科特任教授）、高田広章（大学院情報科学研究科教授）と連名
H24. 2. 2	Novartis-MIT Lectureship Award	大学院理学研究科教授	伊丹 健郎	
H24. 2.16	愛知県若手研究者奨励事業 第6回「わかしゃち奨励賞」 優秀賞	大学院理学研究科助教	吉川 浩史	
H24. 2.16	愛知県若手研究者奨励事業 第6回「わかしゃち奨励賞」 最優秀賞	大学院工学研究科助教	ウヤヌク ムハメット	
H24. 2.16	愛知県若手研究者奨励事業 第6回「わかしゃち奨励賞」 優秀賞	大学院工学研究科助教	安井 隆雄	
H24. 2.17	有機合成化学協会 有機合成化学奨励賞	大学院工学研究科講師	波多野 学	
H24. 2.18	アメリカ科学振興協会（AAAS）フェロー	生物機能開発利用研究センター教授	芦苺 基行	
H24. 3. 8	平成23年度赤崎賞	大学院理学研究科助教	吉川 浩史	
H24. 3.25	日本化学会学術賞	物質科学国際研究センター教授	阿波賀邦夫	

事務職員・技術職員

受賞日	受賞名	受賞者の所属・職名	受賞者	備考
H23. 9. 8	日本工学教育協会「日本工学教育協会賞」 業績賞	全学技術センター技術専門職員	福森 勉	他6名と連名
H23. 9.10	国際血液浄化学会（ISBP）Best abstract 賞	大学院医学系研究科研究員	加藤佐和子	
H24. 1.27	東京大学地震研究所 地震火山災害予防賞	全学技術センター技術専門職員	奥田 隆	

学生

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H23. 1.29	帝人21世紀フォーラム 帝人奨励賞	大学院理学研究科 M1	加門 慶一	
H23. 3. 9	フラーレン・ナノチューブ学会 第39回フラーレン・ナノチューブ総合シンポジウム 若手奨励賞	大学院理学研究科 M2	塩沢 一成	
H23. 6.30	AGU Fall Meeting 2010 Outstanding Student Paper Award	大学院理学研究科 D3	辻 裕司	
H23. 7.12	平成23年度名古屋大学学術奨励賞	大学院理学研究科 D3	飯田あずさ	
H23. 9. 2	49th European High Pressure Research Group Conference Best Poster Award	大学院工学研究科 M1	堀部 太嗣	長谷川正（大学院工学研究科教授）、草場啓治（大学院工学研究科准教授）、丹羽 健（大学院工学研究科助教）と連名
H23. 9. 6	フラーレン・ナノチューブ・グラフェン学会 第40回記念フラーレン・ナノチューブ総合シンポジウム 若手奨励賞	大学院理学研究科 M2	伊東 真一	
H23. 9.10	2010年日本社会情報学会合同研究大会 研究発表優秀賞	大学院情報科学研究科 D3	近藤 真由	安田孝美（大学院情報科学研究科教授）、他1名と連名
H23. 9.11	生体機能関連化学部会 第26回若手フォーラム ポスター賞	大学院理学研究科 M1	寺田 光良	
H23. 9.18	錯体化学会第61回討論会 ポスター賞	大学院理学研究科 D1	谷藤 一樹	
H23. 9.18	錯体化学会第61回討論会 ポスター賞	大学院理学研究科 M2	伊東 真一	
H23. 9.20	第5回分子科学討論会2011札幌 優秀ポスター賞	大学院理学研究科 M2	河崎 直也	
H23. 9.20	第5回分子科学討論会2011札幌 優秀ポスター賞	大学院理学研究科 D2	藤本 卓也	
H23. 9.23	第22回基礎有機化学討論会 ポスター賞	大学院理学研究科 M1	八木亜樹子	
H23. 9.23	第22回基礎有機化学討論会 ポスター賞	大学院理学研究科 M2	中倉 健	
H23. 9.23	第22回基礎有機化学討論会 ポスター賞	大学院理学研究科 M1	暮石 結加	

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H23. 9.23 -24	第2回アジア神経精神薬理学会 (AsCNP) ソウル大会 JSNP Excellent Presentation Award	大学院医学系研究科 D4	ユン ジェスク	
H23. 9.30	コ・メディカル形態機能学会第10回学術集会 学会奨励賞	大学院医学系研究科 D2	蛭川 菜々	
H23.10. 5	An International Conference on Recent Progress in Graphene Research 2011 Best Poster Award	大学院理学研究科 M2	雀 大憲	
H23.10.13	電気情報通信学会マルチメディアと仮想環境 基礎研究会 MVE 賞	大学院情報科学研究科 M2	小林 尊志	野田雅文 (大学院情報科学研究科 D3)、 出口大輔 (大学院情報科学研究科助教)、 村瀬 洋 (大学院情報科学研究科教授)、 他2名と連名
H23.10.22	第5回物質科学フロンティアセミナー ポスター賞	大学院理学研究科 M2	杉 直紀	
H23.11. 5	第44回酸化反応討論会 優秀ポスター賞	大学院理学研究科 M2	森本 禎子	
H23.11. 8	2011年日本金属学会秋期講演大会 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 M2	萩尾 建門	伊藤孝至 (エコトピア科学研究所准教授) と連名
H23.11.11	The 15th International Conference on Thin Films (ICTF-15) Certificate of Award for Encouragement of Research in Thin Films	大学院工学研究科 D2	加藤 公彦	
H23.11.11	The 15th International Conference on Thin Films (ICTF-15) Award for Encouragement of Research in Thin Films	大学院工学研究科 M1	福島 敦史	
H23.11.11	The 15th International Conference on Thin Films (ICTF-15) Award for Encouragement of Research in Thin Films	大学院工学研究科 M2	小田 晃司	乗松 航 (大学院工学研究科助教)、 楠 美智子 (エコトピア科学研究所教授) と連名
H23.11.11	第100回有機合成シンポジウム 優秀ポスター賞	大学院理学研究科 M1	武藤 慶	
H23.11.16	第34回溶液化学シンポジウム ポスター賞	大学院情報科学研究科 PD	高柳 昌芳	長岡正隆 (大学院情報科学研究科教授)、 平尾昌吾 (大学院情報科学研究科 M2) と 連名
H23.11.18	第24回化学とマイクロ・ナノシステム研究会 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 D2	内藤 豊裕	
H23.11.19	日本流体力学会中部支部 第9回日本流体力学会中部支部講演会 中部支部講演会優秀賞	大学院工学研究科 M2	鈴木 角栄	佐宗章弘 (大学院工学研究科教授)、 豊田 篤 (大学院工学研究科研究員)、 今泉貴博 (大学院工学研究科 B4) と連名
H23.11.24	KOREA ROBOTICS SOCIETY The 8th International Conference on Ubiquitous Robots and Ambient Intelligence (URAI2011) Best Student Paper Award	大学院工学研究科 M2	ソン チャン ヒン	宇野洋二 (大学院工学研究科教授)、 香川高弘 (大学院工学研究科助教) と連名
H23.11.25	日本航空宇宙学会 第48回関西・中部支部合同 秋期大会 中部支部学生賞	大学院工学研究科 M2	宮北 健	
H23.11.25	有機合成化学協会東海支部 優秀賞	大学院生命農学研究科 M1	所 聖太	
H23.11.30	応用物理学会 分科会 日本光学会 Optics & Photonics Japan 2011 ベストプレゼンテーション賞	大学院工学研究科 D3	白木 英二	
H23.12. 1	日本金属学会・日本鉄鋼協会東海支部主催 「第21回学生による材料フォーラム」 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 M2	長谷川良道	
H23.12. 1	日本金属学会・日本鉄鋼協会東海支部主催 「第21回学生による材料フォーラム」 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 M2	加藤 領幹	
H23.12. 1	日本金属学会・日本鉄鋼協会東海支部主催 「第21回学生による材料フォーラム」 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 M1	富永 彰	伊藤孝至 (エコトピア科学研究所准教授) と連名
H23.12. 2	The 11th Asian BioCeramics Symposium (ABC2011) ABC Award	大学院工学研究科 D3	ブラカーシュ バルティバン	
H23.12. 2	高分子学会 第42回中部化学関係学協会支部 連合秋季大会 東海高分子優秀学生発表賞	大学院工学研究科 D2	青嶋 紘	
H23.12. 2	高分子学会 第42回中部化学関係学協会支部 連合秋季大会 東海高分子優秀学生発表賞	大学院工学研究科 M1	土居 哲也	
H23.12. 2	高分子学会 第42回中部化学関係学協会支部 連合秋季大会 東海高分子優秀学生発表賞	大学院工学研究科 M2	牧口 航	
H23.12. 3	日本セラミックス協会 平成23年度日本セラミックス協会東海支部 学術研究発表会 優秀講演賞	大学院工学研究科 M2	水野 拓	

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H23.12. 6	IEEE International Symposium on Multimedia (ISM2011) Best Student Paper Award	大学院情報科学研究科 M2	熊谷 章吾	道満恵介 (大学院情報科学研究科 D3)、出口大輔 (大学院情報科学研究科助教)、村瀬 洋 (大学院情報科学研究科教授) 他 2名と連名
H23.12. 6	分子シミュレーション研究会 第25回分子シミュレーション討論会 (ポスター発表) 学生優秀発表賞	大学院工学研究科 M2	大野 公子	
H23.12. 7	第54回自動制御連合講演会 優秀発表賞	大学院工学研究科 M2	栗田 圭祐	
H23.12. 9	第38回有機典型元素化学討論会 優秀ポスター賞	大学院理学研究科 M2	秦 一博	
H23.12. 9	第38回有機典型元素化学討論会 優秀講演賞	大学院理学研究科 D2	櫛田 知克	
H23.12.11	International Symposium on EcoTopia Science 2011 Excellent Presentation Award	大学院工学研究科 M1	丸山 拓馬	伊藤孝至 (エコトピア科学研究所准教授) と連名
H23.12.18	進化計算学会 進化計算シンポジウム2011 ベストポスター発表賞	大学院工学研究科 M1	工藤 文也	
H23.12.24	第11回日本表面科学会中部支部研究会 講演奨励賞	大学院工学研究科 M2	松田 敬太	乗松 航 (大学院工学研究科助教)、楠 美智子 (エコトピア科学研究所教授) と連名
H23.12.24	日本表面科学会中部支部 第11回日本表面科学会中部支部研究会 講演奨励賞	大学院工学研究科 M2	柴山 茂久	
H24. 1. 6	2011年度国際ソロプチミスト名古屋 クラブ賞	大学院理学研究科 M2	松岡 亜季	
H24. 1. 8	The 14th International Workshop of Advanced Plasma Processing and Diagnostics The 2nd Workshop for NU-SKKU Joint Institute for Plasma-Nano Materials The Student Best Award	大学院工学研究科 D2	竹内 拓也	
H24. 1. 8	第25回日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウム (JSR12) 学生発表賞	大学院工学研究科 M2	小川 古都	
H24. 1.11	HASC Challenge 2011 チャレンジ特別賞	大学院情報科学研究科 M1	伊藤 義浩	榎堀 優 (大学院情報科学研究科研究員)、間瀬健二 (大学院情報科学研究科教授) と連名
H24. 1.11	The Materials Research Society of Japan 21st Symposium of Materials Research Society of Japan Certificate of Award for Encouragement of Research of Materials Science	大学院工学研究科 M2	佐野 誠実	
H24. 1.11	The Materials Research Society of Japan 21st Symposium of Materials Research Society of Japan Certificate of Award for Encouragement of Research of Materials Science	大学院工学研究科 M1	高橋 拓也	
H24. 1.21	平成23年度日本臨床微生物学会 日本バクテリオン・ディッキンソン賞	大学院医学系研究科 M2	服部 達也	
H24. 1.23	平成23年度電気関係学会東海支部連合大会 奨励賞	大学院情報科学研究科 M2	服部 達哉	
H24. 1.23	平成23年度電気関係学会東海支部連合大会 奨励賞	大学院工学研究科 M1	丹羽 朝信	
H24. 1.23	平成23年度電気関係学会東海支部連合大会 奨励賞	大学院情報科学研究科 D2	村田 匡輝	
H24. 1.23	平成23年度電気関係学会東海支部連合大会 奨励賞	大学院情報科学研究科 D2	久徳 遙矢	出口大輔 (大学院情報科学研究科助教)、井手一郎 (大学院情報科学研究科准教授)、村瀬 洋 (大学院情報科学研究科教授) 他 2名と連名
H24. 1.27	帝人21世紀フォーラム 帝人敢闘賞	大学院理学研究科 M1	藤原 美帆	
H24. 1.30	日本塑性加工学会 第62回塑性加工連合講演会 優秀論文講演奨励賞	大学院工学研究科 M2	長谷川良道	
H24. 2. 1	電子情報通信学会 (通信ソサイエティ和文論文誌編集委員会) 学生優秀論文賞	大学院工学研究科 M2	太田健太郎	小林健太郎 (エコトピア科学研究所助教)、山里敬也 (教養教育院教授)、片山正昭 (エコトピア科学研究所教授) と連名
H24. 2. 1	中部エリア 2011キャンパスベンチャーグランプリ CVG 中部大賞	情報文化学部 4年	大俣 友佳	他 1名と連名
H24. 2.10	東海地区 3 大学 (名大、豊技科大、名城大) 合同修士論文発表会 優秀発表賞	大学院工学研究科 M2	太田健太郎	

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H24. 2.17	International Association of Sexual Plant Reproduction Research The M.T.M. Willemse Poster Award of 2012	大学院理学研究科 D1	筒井 大貴	
H24. 3. 1	第2回(平成23年度)日本学術振興会 育志賞	大学院理学研究科 D3	小山 昌子	
H24. 3. 3	第21回ライフサポート学会 奨励賞	大学院工学研究科 M2	栗田 圭祐	
H24. 3. 7	フラーレン・ナノチューブ・グラフェン学会 第41回フラーレン・ナノチューブ・グラフェン 総合シンポジウム 若手奨励賞	大学院理学研究科 M2	林 宏恩	
H24. 3.15	言語処理学会第17回年次大会 若手奨励賞	大学院情報科学研究科 M2	葛原 和也	
H24. 3.26	日本化学会 東海支部長賞	大学院理学研究科 M2	林 宏恩	

*受賞者の所属・職名又は学年は、受賞当時

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成24年2月16日～3月15日]

記事	月日	新聞等名
1 濱口総長は中京独立戦略本部初会合で産業界への支援を求める声が続く中、「女性が働きやすい環境を整えることが大切」と語る	2.16 (木)	中日 (朝刊)
2 現代日本誤百科 (572):「気分の悪さを訴える」町田 健文学研究科教授	2.16 (木)	中日 (朝刊)
3 隈本邦彦減災連携研究センター客員教授は東京大学地震研究所による「首都直下を含む南関東でマグニチュード7級の地震が4年以内に起きる確率は70%」という試算について、「一定の科学的根拠のある数字でリスクが伝わり地震対策を促す意味で良かった」と語る	2.16 (木)	読売
4 紙つぶて:ナノと異分野交流 篠原久典理学研究科教授	2.16 (木)	中日 (朝刊)
5 学務部入試課は国公立大学2次試験のカンニング防止について、「試験中の見回りを注意深く実施し、不正行為を未然に抑止したい。」と語る	2.16 (木)	毎日 (夕刊)
6 書籍「宇宙100の謎2」:福井康雄理学研究科教授が監修、戸田山和久情報科学研究科教授、早川貴敬理学研究科COE 研究員らが執筆	2.17 (金)	中日 (朝刊)
7 依田 憲環境学研究科准教授による狩猟鳥獣カワウの生態解明への取り組みが取り上げられる	2.17 (金)	朝日 (朝刊)
8 中部地区では本学ほかに委員会がある特定非営利活動法人アイセック・ジャパンは中部地区の学生と企業のインターン活動の取り組みを表彰する「セントラル・インターンシップ・アワード」を開催する	2.17 (金)	日経 (朝刊)
9 名古屋大学レクチャーにおいてドナルド・キーンコロンビア大学名誉教授が講演し、「日本文学を紹介するという啓蒙的な仕事に参加できたのは一番の喜び」と語る	2.18 (土)	朝日 (夕刊)
10 医学部附属病院老年内科市民公開講座「高齢者の摂食嚥下・栄養と健康について」開催:12日 葛谷雅文医学系研究科教授らが発表	2.19 (日)	中日 (朝刊)
11 高野雅夫環境学研究科准教授の豊田市旭地区における若者の過疎地移住支援が取り上げられる	2.19 (日)	朝日 (朝刊)
12 柔道安全指導検討委員会の初会合が18日に開かれ、傍聴した内田 良教育発達科学研究科准教授は「柔道の危険性が知られるきっかけになれば」と語る	2.19 (日)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
13 現代日本誤百科 (573):「非常に計り知れない」ものがある 町田 健文学研究科教授	2.20 (月)	中日 (朝刊)
14 大俣友佳さん本学情報化学学部学生と大俣美佳さん中部大学生は学級編成システムでキャンパスベンチャーグランプリ中部で大賞を受賞、3月に全国大会への進出を果たす	2.20 (月)	中日 (朝刊)
15 現代日本誤百科 (574):「当店でつけたネーミング」町田 健文学研究科教授	2.21 (火)	中日 (朝刊)
16 ひと・仕事:伊藤大輔文学研究科准教授 著書「肖像画の時代—中世形成期における絵画の思想的深層」	2.21 (火)	中日 (朝刊)
17 現代日本誤百科 (575):「無造作に自生」している 町田 健文学研究科教授	2.22 (水)	中日 (朝刊)
18 第20回 spcafé「21世紀の世界と日本」開催:24日 春名幹男国際言語文化研究科特任教授が講演	2.22 (水)	中日 (朝刊)
19 現代日本誤百科 (576):これからの「総理は並のことではない」町田 健文学研究科教授	2.23 (木)	中日 (朝刊)
20 情報化学部長に川口 潤同教授を再任	2.23 (木)	朝日 (朝刊)
21 高等教育研究センター長に早川義一工学研究科教授を選出	2.23 (木)	中日 (朝刊)
22 紙つぶて:研究人生の岐路 篠原久典理学研究科教授	2.23 (木)	中日 (夕刊)
23 本学などが参加する国際研究グループが昨年発表した素粒子ニュートリノが光より早く飛ぶとした実験について、使用された光ファイバーケーブルに緩みが見つかったことがわかり、5月に再実験が予定されている	2.23 (木)	日経 (夕刊)
	2.24 (金)	他2社 日刊工業 他2社
24 内田 良教育発達科学研究科准教授の柔道死亡事故調査が参照される	2.23 (木)	朝日 (夕刊)
	3. 1 (木)	読売
	3. 5 (月)	読売
	3.13 (火)	朝日 (朝刊)
25 情報基盤センター長に伊藤義人工学研究科教授を選出	2.24 (金)	中日 (朝刊)
26 レーザー:野依良治本学特別教授は理化学研究所が3月に供用開始するX線自由電子レーザー「SACLA」について「研究だけでなく産業界などの幅広い分野で利用してもらえるような環境を整えたい」と語る	2.24 (金)	日刊工業
27 国公立大学2次試験カンニング対策について本学は受験生に携帯電話を出して電源を切ってもらう対策を徹底する	2.24 (金)	中日 (朝刊)
28 本学などが参加する国際研究チームは「素粒子ニュートリノは超光速」という観測結果が誤っている可能性があることについてケーブルの緩みのほかに実験全体を制御する時計が正しく動作していなかった恐れがあると発表	2.24 (金)	日経 (夕刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成24年2月16日～3月15日]

記事	月日	新聞等名
29 浅川晃広国際開発研究科講師はオーストラリアの政権与党労働党のギラード首相とラッド氏の対立について「外交や安保には影響はほとんど出ない、労働党が現在の政権の失策を根本的に正さなければ労働党の人気回復への道のりは険しい」と語る	2.24 (金)	日経 (朝刊)
30 環境学研究科10周年記念グローバルCOE特別講演会「地球にやさしい資源・エネルギー利用へー東日本大震災から1年」開催：29日 真鍋淑郎本学COE特別招へい教授、エルンスト・フォン・ワイツゼッカー環境学研究科客員教授、ハンス＝ペーター・デュール同客員教授、米本昌平同客員教授が講演、林良嗣同教授がパネリストとして出席	2.25 (土) 3. 1 (木)	中日 (朝刊) 中日 (朝刊)
31 国立大学2次試験始まる	2.25 (土) 2.26 (日)	中日 (夕刊) 他2社 読売
32 本学など国立大学2次試験前期日程で地震関連の問題が出題される	2.25 (土)	中日 (朝刊)
33 患者を生きる：口唇口蓋裂 稲葉啓太さん本学学生	2.25 (土)	朝日 (朝刊)
34 ノーベル賞受賞者を囲むフォーラム「次世代へのメッセージ」開催：25日 益川敏英本学特別教授が「科学の未来、探求する心」をテーマに講演	2.26 (日) 3.14 (水)	読売 読売
35 朝日カルチャーセンター新講座：「シェリング『人間的自由の本質』を読む」宮原 勇文学研究科教授、「明恵上人の思想と絵画」伊藤大輔同准教授、「ラテン語初級」國原吉之助本学名誉教授	2.26 (日) 3.15 (木)	朝日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
36 現代日本誤百科 (577)：「アートな話題」町田 健文学研究科教授	2.27 (月)	中日 (朝刊)
37 医学部附属病院で脳死肝移植成功	2.27 (月)	中日 (夕刊)
38 本学と中津川市は寄附講座協定を締結し、同市に開設する医学部の講座に参加する医師らが市内の公立病院等で医療行為に従事する	2.28 (火)	中日 (朝刊)
39 小澤正直情報科学研究科教授は小澤の不等式が「量子暗号の実用化」に与える影響について「正しい法則を使う方が量子暗号技術の向上に役立つのは当然」と語る	2.28 (火)	毎日 (朝刊)
40 菱川明栄理学研究科教授の「コヒーレントレーザー反応場における化学過程の解明」が東レ科学振興会の研究助成先として選出される	2.28 (火)	日刊工業
41 減災連携研究センターは中部電力ほかと協力して3つの寄附研究部門を新設する	2.29 (水) 3.10 (土)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊) 毎日 (朝刊)
42 現代日本誤百科 (578)：「事件が未解決に終わる」町田 健文学研究科教授	2.29 (水)	中日 (朝刊)
43 生源寺眞一生命農学研究科教授が審査委員長を務める第71回中日農業賞の贈呈式が開催された	2.29 (水)	中日 (朝刊)
44 医療の現場から：急がれる精神医療対策 尾崎紀夫医学系研究科教授	2.29 (水)	朝日 (朝刊)
45 医学部附属病院は入院中の子どもの家族を支援するための宿泊施設「ドナルド・マクドナルド・ハウス なごや」を開設する	2.29 (水) 3. 2 (金) 3. 4 (日)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊) 読売 朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
46 叙位叙勲：正四位 岩井 章本学名誉教授	2.29 (水)	読売
47 大企業と中小企業の求人倍率に7倍の開きが生じている就活ミスマッチに関して金田愛子さん本学学生の就職活動が取り上げられる	2.29 (水)	中日 (夕刊)
48 濱口総長が秋入学について語る	3. 1 (木)	中日 (朝刊)
49 現代日本誤百科 (579)：「驚きの発見」町田 健文学研究科教授	3. 1 (木)	中日 (朝刊)
50 紙つぶて：異端児の闘い 篠原久典理学研究科教授	3. 1 (木)	中日 (夕刊)
51 「野依科学奨励賞」10周年記念イベント「ノーベル賞がつなぐ人の絆 共に生きるために」開催：29日 野依良治本学特別教授が特別講演	3. 1 (木)	日刊工業
52 日経実力病院調査：医学部附属病院の膀胱がん治療の実績が取り上げられる	3. 1 (木)	日経 (夕刊)
53 山口茂弘理学研究科教授らの研究グループは炭素材料にホウ素を組み込む技術を開発	3. 2 (金)	日刊工業
54 中部の両翼へー航空宇宙産業が挑む：田島宏康太陽地球環境研究所教授が大同大学ほかと共同開発した中部発の小型人工衛星「ChubuSat-1」が取り上げられる	3. 2 (金)	日経 (朝刊)
55 名大カフェ“Science, and Me”第20回「宇宙に外側はあるかー現代宇宙論のフロンティアー」開催：14日 松原隆彦基礎理論研究センター准教授が講演	3. 2 (金)	読売
56 留学生センター海外留学室 交換留学シンポジウム開催：15日	3. 2 (金)	読売
57 帝国データバンクの愛知県内の社長数調査で本学は7位	3. 2 (金) 3. 3 (土)	中日 (朝刊) 日経 (朝刊)
58 山本理事が呼びかけ人の一人である中部地方のエネルギーについて立場や考え方を超えて議論する「中部エネルギー市民会議」が発足	3. 3 (土)	読売
59 名古屋大学オープンレクチャー2012開催：23日	3. 3 (土)	中日 (朝刊)
60 生源寺眞一生命農学研究科教授が富士重夫氏全国農業協同組合中央会専務理事と対談	3. 4 (日)	日経 (朝刊)
61 第49回読売農学賞受賞 生源寺眞一生命農学研究科教授	3. 4 (日)	読売
62 生源寺眞一生命農学研究科教授が被災地の農業再生について語る	3. 4 (日)	読売
63 秘密保全法案について 春名幹男国際言語文化研究科特任教授	3. 4 (日)	読売
64 病院の実力：アレルギーの病気 医学部附属病院の実績が取り上げられる	3. 4 (日)	読売
65 松本邦弘理学研究科教授や久本直毅同准教授らの研究グループは切れた神経細胞を再生させる働きのあるタンパク質を発見	3. 5 (月)	中日 (朝刊)
66 現代日本誤百科 (580)：「オンエアに流れる」町田 健文学研究科教授	3. 5 (月)	中日 (朝刊)
67 経済教室：金融円滑化法再延長について 家森信善経済学研究科教授	3. 5 (月)	日経 (朝刊)
68 山本純也さん本学大学院生らが鉄塔に巣を作ったカワウのヒナの方が巣立つ確率が高いという研究成果をまとめた	3. 5 (月)	朝日 (夕刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成24年2月16日～3月15日]

記事	月日	新聞等名
69 現代日本誤百科 (581):「人権を救済」する 町田 健文学研究科教授	3. 6 (火)	中日 (朝刊)
70 創業科学研究所長に副総長である松下裕秀工学研究科教授を選任	3. 6 (火)	中日 (朝刊)
71 愛知県警察と中部管区警察局は福和伸夫減災連携研究センター教授に全国初の災害アドバイザーを委嘱した	3. 6 (火)	中日 (朝刊) 他2社
72 丹羽亜衣さん本学大学院生は中日新聞の「学生之新聞」第538号の学生取材スタッフを務める	3. 6 (火)	中日 (朝刊)
73 現代日本誤百科 (582):「サンゴに悪影響だ」町田 健文学研究科教授	3. 7 (水)	中日 (朝刊)
74 室原豊明医学系研究科教授、竹下享典医学部附属病院講師らの研究グループはストレスが生活習慣病に影響する仕組みを解明	3. 7 (水)	中日 (朝刊) 毎日 (朝刊)
75 本学と岡山大学の研究チームは酸性の土壌でも成長する大麦を開発	3. 7 (水)	朝日 (朝刊)
76 グリーンモビリティ連携研究センター長に小野木克明工学研究科教授、基礎理論研究センター長に野尻伸一理学研究科教授を選出	3. 7 (水)	中日 (朝刊)
77 第29回 (平成23年度) 永井科学技術財団賞学術賞:長谷川 正工学研究科教授、奨励賞:藤田真哉経済学研究科准教授、国際交流助成金:伊藤淳一工学研究科助教	3. 7 (水) 3.10 (土)	日刊工業 中日 (朝刊)
78 国立大学協会総会についての記事で、濱口総長の秋入学についての考えが取り上げられる	3. 8 (木)	朝日 (朝刊)
79 現代日本誤百科 (583):代表の新「ユニ」町田 健文学研究科教授	3. 8 (木)	中日 (朝刊)
80 榎田 啓工学研究科講師と吉川浩史理学研究科助教が第2回赤崎賞を受賞し8日に開催された授賞式で濱口総長は「未来の赤崎を目指して欲しい」と語る	3. 9 (金)	中日 (朝刊)
81 紙つづて:仁義なき戦い 篠原久典理学研究科教授	3. 8 (木)	中日 (夕刊)
82 国公立大学2次試験前日程合格発表	3. 8 (木)	中日 (夕刊) 毎日 (夕刊)
83 地震による液状化対策に関して福和伸夫減災連携研究センター教授のアドバイスが取り上げられる	3. 9 (金)	読売
84 展覧会「中川 運河 写真」開催:6日～18日 茂登山清文情報科学研究科准教授が企画	3. 9 (金) 3.10 (土)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
85 中部の地方銀行は本学などの研究機関と顧客である中小企業との産学連携の支援を強化している	3. 9 (金)	日経 (朝刊)
86 博物館 企画展「吉崎誠海藻コレクション」開催:3月10日～4月14日、特別講演会「津波に襲われた海藻標本のレスキュー活動」開催:11日、「東北地方太平洋沖地震から学ぶ過去の警告」開催:15日	3. 9 (金) 3.10 (土)	中日 (朝刊) 日経 (夕刊)
87 第3回次世代自動車公開シンポジウム「次世代自動車材料技術研究の地域間連携をめざして」開催:21日	3. 9 (金)	日刊工業
88 愛知東邦大学教授高木靖彦氏本学卒業生は映画「おかえり、はやぶさ」について研究者の視点から見所を語る	3. 9 (金)	読売
89 「第9回 テラ・カフェ『ラオス講座』」開催:18日「私たちの国の自然環境・社会環境 (9)」をテーマにティプさん本学大学院生が講演	3.10 (土)	中日 (朝刊)
90 講演会「ヒッグス粒子を探せ」開催:17日 戸本 誠理学研究科准教授らが講演	3.10 (土)	中日 (朝刊)
91 昭和史再訪:昭和東南海地震についての故飯田汲事本学名誉教授の調査が取り上げられる	3.10 (土)	朝日 (夕刊)
92 東日本大震災から1年「覚悟と自覚」福和伸夫減災連携研究センター教授	3.11 (日)	朝日 (朝刊)
93 物理学ルネサンス:小澤正直情報科学研究科教授の小澤の不等式、本学ほか国際共同研究グループが行った「超光速ニュートリノ」の実験が取り上げられる	3.11 (日)	日経 (朝刊)
94 震災1年日本再生の道標 益川敏英本学特別教授	3.11 (日)	日経 (朝刊)
95 書籍:「科学と人間の不協和音」池内 了本学名誉教授著	3.11 (日)	朝日 (朝刊)
96 現代日本誤百科 (584):「いいところまで詰め寄る」町田 健文学研究科教授	3.12 (月)	中日 (朝刊)
97 いまこそ日本プロジェクト in 名古屋 寄稿:松田直之医学系研究科教授、畠山和人同看護師長、宮川泰宏医学部附属病院薬剤師、福和伸夫減災連携研究センター教授、隈本邦彦同客員教授、護 雅史同准教授	3.12 (月)	日経 (朝刊)
98 鷺谷 威減災連携研究センター教授は東日本大震災の地震学への影響に関して「地震学を変革する必要がある、防災をもっと評価し、他の研究分野との協力も深めるべきだ」と語る	3.12 (月)	朝日 (朝刊)
99 忍久保 洋工学研究科教授の研究が矢崎科学技術振興記念財団の一般研究助成先に採択される	3.12 (月)	日刊工業
100 日本学士院賞受賞 中西 聡経済学研究科教授	3.13 (火)	日経 (朝刊) 他4社
101 エコトピア科学シンポジウムグリーンエネルギーシステムシンポジウム開催:12日 渡辺理事があいさつ	3.13 (火)	中日 (朝刊)
102 現代日本誤百科 (585):「フォーカスが絞られる」町田 健文学研究科教授	3.13 (火)	中日 (朝刊)
103 医学部附属病院は新しい体外式補助人工心臓の試みを始めた	3.13 (火)	中日 (朝刊)
104 一宮市三岸節子記念美術館「美術の学校5『院政期絵巻の諸相』」開催:20日 伊藤大輔文学研究科准教授が講師を務める	3.13 (火)	朝日 (朝刊)
105 第16回東海学生チャレンジテニストーナメント:平松佑麻さん本学学生 準決勝出場	3.13 (火)	読売
106 五感で楽しむ「和」名古屋シンポジウム 南山大学教授安田文吉氏本学卒業生が寄稿する	3.13 (火)	朝日 (朝刊)
107 現代日本誤百科 (586):初詣に「お出かけされる」方 町田 健文学研究科教授	3.14 (水)	中日 (朝刊)
108 本学ほか6大学はイギリスの6大学と産学連携ほかで協力する新たな枠組み「RENKEI」を設ける	3.14 (水)	日経 (朝刊) 中日 (夕刊)
109 第21回 spcafé「怖い?楽しい?昆虫と微生物の共生」開催:22日 梶村 恒生命農学研究科准教授が講演	3.14 (水)	中日 (朝刊)
110 現代日本誤百科 (587):「孤独死に手を貸す」べきだ 町田 健文学研究科教授	3.15 (木)	中日 (朝刊)
111 2008年ノーベル物理学賞・化学賞展示室来場者1万人突破記念式典開催:14日 益川敏英本学特別教授があいさつ	3.15 (木)	中日 (朝刊)
112 震災に強い住まいは?:福和伸夫減災連携研究センター教授は災害リスクを調べる際の古地図や国や自治体のハザードマップの有用性を語る	3.15 (木)	朝日 (朝刊)
113 第87回中部科学技術センターフォーラム開催:29日 社本英二工学研究科教授が「これからのものづくりを支える超精密技術を目指して」と題して講演	3.15 (木)	中日 (朝刊)
114 紙つづて:科学者の責務 篠原久典理学研究科教授	3.15 (木)	中日 (夕刊)

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

3月17日(土)～8月31日(金)

場 所：博物館展示室
時 間：10:00～16:00
休 館 日：日・月曜日
(8月11日～14日臨時休館)
入 場 料：無料

[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767

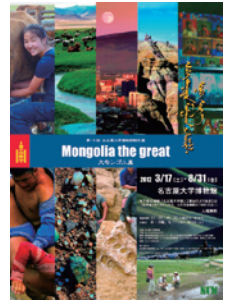
第16回博物館特別展「大モンゴル展」

[関連講演会]

4月14日(土)

場 所：博物館講義室
時 間：13:00～14:30

講演題目：「草原に埋もれた宝を求めて」
講 演 者：高橋裕平氏 (独立行政法人産業技術総合研究所
東北サテライト総括主幹)
参 加 費：無料



4月21日(土)、5月12日(土)、
5月26日(土)、6月9日(土)、
6月23日(土)、7月7日(土)、
7月21日(土)、8月4日(土)

場 所：インキュベーション施設1階
プレゼンテーションルーム
時 間：10:00～15:00

[問い合わせ先]
社会貢献人材育成本部
ビジネス人材育成センター 052-747-6490

ビジネス人材育成センター
平成23年度前期B人セミナー

テ ー マ：「Job Hunting in English」、「キャリアシード」(4/21)
「弁理士の業界と業務」
「海外でキャリアを構築するということ」(5/12)
「なぜ、あの人は惚れ惚れするほど、コミュニケーション上手なのか?」(5/26)
「30代のシゴト」、「博士の就活スタート・リスタート」(6/9)
「コンサルティング業界」、「博士・ポスドクのための就職ガイダンス」(6/23)
「製造業における、知財戦略と知財部門の業務内容」
「プレゼンテーションスキル研修」(7/7)
「再生医療の現状と今後の展望」(7/21)
「ビジネスマナーと企業のルール」、「食品のためのヒト臨床試験業界」(8/4)

4月21日(土)、5月16日(水)、
11月24日(土)

場 所：博物館野外観察園、博物館展示室
時 間：13:00～15:00
参 加 費：無料

[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767

野外観察園見学会

内 容：西田佐知子(博物館助教)他による案内



5月10日(木)～5月12日(土)

場 所：ES 総合館1階ES ホール
時 間：9:00～17:35 (5/10)、
9:00～18:00 (5/11)、
9:30～12:40 (5/12)
参 加 費：無料

[問い合わせ先]
MSCRS2012実行委員会
mscrs2012@ncube.human.nagoya-u.ac.jp

科学技術振興機構国際会議：
凝集反応系のマルチスケールシミュレーション
(MSCRS2012)

内 容：凝集系における最新の化学現象やそれを取り扱う理論や方法に
関して、国内外の理論化学者・計算科学者が共同して討論。
口頭講演、ポスター講演、参加者全員の自由な意見交換



5月12日(土)～5月13日(日)

場 所：博物館 (5/12)、
南知多の海岸(知多郡南知多町) (5/13)
時 間：14:00～16:30 (5/12)、
9:00～16:00 (5/13)
定 員：30名
対 象：小学3年生から中学3年生とその
保護者(中学生以上は個人参加可)
参 加 費：1,000円

[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767

名古屋市科学館共催事業
第1回地球教室

テ ー マ：「深海の地層と化石を調べよう！」
内 容：深海でできた知多半島の地層と、そこに住んでいた古代の生物
の化石を観察する



イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

5月26日(土)

場 所：博物館展示室
時 間：14:00～15:00

博物館コンサート 「知られざる音楽大国 ベネズエラのしらべ ー国民的楽器クアトロを中心にー」

演奏曲目：「草原の魂」、「コーヒールンバ」、「アプーレをひと巡り」他
出 演：「CELESTE (セレステ)」 出口泰司氏、岡野友絵氏



[問い合わせ先]

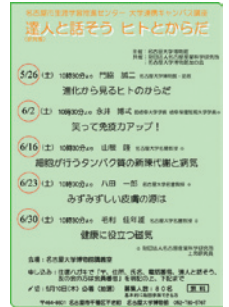
博物館事務室 052-789-5767

5月26日(土)、6月2日(土)、
6月16日(土)、6月23日(土)、
6月30日(土)

場 所：博物館講義室
時 間：10:30～12:00
定 員：80名
対 象：一般(基本的に毎回参加できる人)
参 加 費：無料

名古屋市生涯学習推進センター 大学連携キャンパス講座 「達人(研究者)と話そうーヒトとからだー」

講演題目：「進化から見るヒトのからだ」(5/26)
講 演 者：門脇誠二(博物館助教)
講演題目：「笑って免疫力アップ!」(6/2)
講 演 者：永井博弐氏(岐阜保健短期大学学長)
講演題目：「細胞が行うタンパク質の新陳代謝と病気」(6/16)
講 演 者：山根 隆(本学名誉教授)
講演題目：「みずみずしい皮膚の源は」(6/23)
講 演 者：八田一郎(本学名誉教授)
講演題目：「健康に役立つ磁気」(6/30)
講 演 者：毛利佳年雄(本学名誉教授)



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

6月12日(火)～6月14日(木)

場 所：アデレード大学(オーストラリア)
登 録 料：税込330AUD (AC21メンバー機関)、
税込385AUD (AC21メンバー機関以外)、
税込220AUD (学生)

第6回 AC21国際フォーラム

テ ー マ：「Maximizing the Benefits of Internationalisation」
講 演 者：AC21メンバー大学、メンバー大学以外からの研究者、国際関係の専門家

[問い合わせ先]

国際部国際企画課
国際学術コンソーシアム(AC21)推進室
052-789-5684

名大トピックス No.227 平成24年4月16日発行

編集・発行/名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町(〒464-8601)

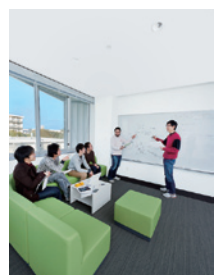
TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ
(<http://www.nagoya-u.ac.jp/extra/topics/>)でもご覧いただけます。

表紙

ES 総合館で物理学談義に
興じる学生
(平成24年3月14日)

※今年度の表紙写真は、「知
の交流」の場で学びを深め
る本学学生の日常を紹介
します。



120 創薬科学研究科の原点 — 半世紀前の薬学部設置計画 —

2012(平成24)年4月1日、名大に大学院創薬科学研究科が設置されました。念願の薬学系部局の誕生です。

名大に薬学系部局が欲しいという願いは、実に半世紀前からのものです。第二次世界大戦前、薬学部を持つ帝国大学は東京だけでしたが、戦後になって、1953(昭和28)年から64年にかけて、名大を除く旧帝大に薬学部が大学院薬学研究科があいついで設置されていました。

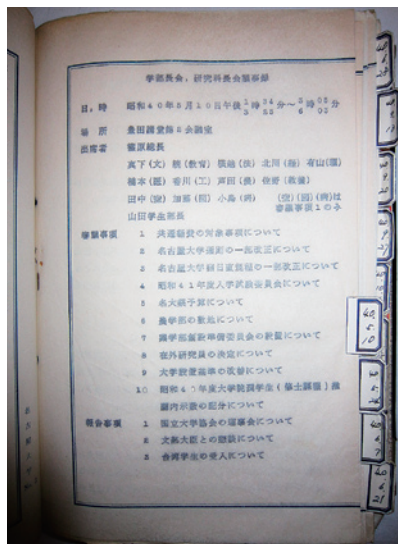
名大とはいえば、薬学部の母体となるべき学科も置かれていない状況でした(医学部の薬理学教室は古くからありました)。そこで、まず医学部薬学科の設置をめざし、1962(昭和37)年度概算要求にこれを盛り込みました。以後、65年度概算要求まで要求が続けられましたが、いずれも実現しませんでした。

そして1965(昭和40)年、5月の学部長会において、篠原卯吉総長から薬学部の設置が提議されました(写真1)。医学部からの要望をうけてのものです。

その後、専門委員会などで検討され、基礎薬学科(完成6講座、1学年30名)、製薬学科(完成6講座、1学年40名)の2学科案が、早くも6月の評議会で承認をうけて、66年度概算要求に上程されたのです。教員の具体的な人選も進められ、名大の現役教員から多く選考される予定になっていました。文部省は、「学部の設置については、特別の事情があり、学部設置の諸条件について明確な見通しがある場合以外は、原則として行わない。」という基本方針でしたが、それを承知の要求でした。

しかし、この要求は認められませんでした。具体的な却下理由は分かりませんが、文部省の基本方針に加え、当時の高度経済成長期の日本においては、工学部や理学部の拡充が優先されたという背景も考えられます。

その後も、1980(昭和55)年度概算要求まで、薬学部設置の要求が続けられました。今回の創薬科学研究科設置は、まさに念願であるといえるのです。



3	4	5
2	1	

- 1965(昭和40)年、学部長会に薬学部の設置が提議された時の記録。のちに文部省へ提出された概算要求書の附属参考書における設置理由には、まず背景として、最近の治療医学が抗生物質の発見等により全く面目を一新し、治療医学の進歩と薬学の発展が誠に密接になり、今後の医学の進歩のためには医学者と薬学者の相互協力が益々重要性を増すことを挙げ、さらに旧帝大の中では名大だけが薬学系学部等を欠いており、総合大学としての体系確立と、医学部の中部地区における使命遂行のため、単なる薬剤師を養成するのではなく、「高度の能力を有する薬学者を養成」することを目的とする、と記されている。
- 名大の評議会や学部長会などの記録。作成後30年を経過したものが大学文書資料室に移管され、一般公開されている(閲覧には内容審査が必要)。
- 当時の篠原卯吉総長(1964年頃の映像)。
- 1966(昭和41)年頃の東山キャンパス。
- 1966(昭和41)年頃の鶴舞キャンパス。